河内寺廃寺跡発掘調査報告書

2007. 7

東大阪市教育委員会

河内寺廃寺跡発掘調査報告書

2007. 7

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本書は、河内寺廃寺跡の発掘調査についてその成果をまとめています。河内寺廃寺跡にはじめて発掘の鍬が入ったのは昭和42年、時に本市東大阪市が誕生した年であります。それ以来断続的に調査が行なわれてきました。平成16年度・17年度に行われた調査では、きわめて残りの良い塔跡が見つかりました。側柱の礎石がこれだけ良く残っている塔は珍しく、貴重な建物跡です。詳しくは本文に記しています。この塔の発見を契機に東大阪市では、次世代に引き継ぐべく、河内寺廃寺跡を現状で保存するため、公有化事業を開始しました。本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成19年7月

東大阪市教育委員会

例　　言

1　本書は、保存目的および開発工事に伴い実施した河内寺廃寺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の刊行に要する経費は、平成19年度埋蔵文化財緊急発掘調査費(国庫補助金)から充当した。

3　調査は、大阪府教育委員会および東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

4　現地調査は菅原章太が、遺物整理は才原金弘が担当して行なった。

5　現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(2000年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。

6　本書の執筆はⅠ～Ⅳ・Ⅵを菅原、Ⅴを才原が担当した。編集は菅原が行なった。

7　考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年）の表記に従った。

8　本文の記述にあたり、遺跡の名称として「河内寺廃寺跡」を使用したほか、存続時期の寺院を表現する名辞として、暫定的に「河内寺廃寺」を使用した。これは厳密には存続時期の寺院呼称が不明であることに拠る。

9　伽藍内建物や瓦などは所属時期の説明のため、時代区分の用語として暫定的に「飛鳥時代」「白鳳時代」を使用する。年代は前者が６世紀末～７世紀中ごろまで、後者が７世紀中ごろ～８世紀初頭を目安とする。

10　現地調査の実施及び本報告書作成にあたり、河内寺跡調査指導委員会（委員長　大脇　潔、委員　森　郁夫、委員　上原　真人）の指導を仰いだ。(敬称略)

目　　次

Ⅰ．調査の経緯と体制……1
　1）調査に至る経緯……1
　2）調査組織……1
　3）調査方法と目的……2
　4）調査の経緯と公有化……2
Ⅱ．位置と環境……5
　1）寺名……5
　2）位置と周辺の地形……5
　3）歴史的環境……5
Ⅲ．調査の概要……8
　1）発掘調査前の河内寺廃寺跡……8
　2）第１次調査（昭和42年度）……8
　3）第２次調査（昭和47年度）……9
　4）第３次調査（昭和48年度）……9
Ⅳ．伽藍内施設の調査……10
　1）金堂（第１次・３次・15次調査）……10
　2）塔（第11次調査）……16
　3）東面回廊（第２次・15次調査Ｃ地区）……21
　4）南面回廊（第13次・16次調査）……25
　5）その他……28
Ⅴ．出土遺物……28
　1）寺創建時以前の遺物……28
　2）寺創建～廃絶時の遺物……32
　3）第15次調査出土遺物……48
　4）第16次調査出土遺物……52
Ⅵ．調査成果の総括……55
　1）河内寺廃寺跡の伽藍内塔堂と回廊の特徴……55
　2）出土した軒瓦と金堂・回廊存続の時期……56
　3）河内寺廃寺の建立氏族と河内郡衙……57

挿 図 目 次

第１図　河内寺廃寺跡の調査位置図……4
第２図　河内寺廃寺跡とその周辺の遺跡……7
第３図　金堂基壇平面図……11・12
第４図　金堂基壇南辺・東辺実測図（第15次調査Ａ地区）……13
第５図　金堂基壇北西隅実測図（第15次調査Ｆ地区）……14
第６図　金堂基壇西辺中央部実測図（第15次調査Ｈ地区）……14
第７図　金堂基壇南西隅実測図（第15次調査Ｂ地区）……15
第８図　金堂基壇北東部実測図（第15次調査Ｇ地区）……15
第９図　塔平面図……17
第10図　塔基壇・礎石実測図……18
第11図　塔土層断面図……19
第12図　側柱礎石抜取穴実測図……19
第13図　中世仏堂基壇立面図……19
第14図　塔基壇立面図……19
第15図　塔南面石段実測図……20
第16図　東面回廊北部実測図（第15次調査Ｃ地区）……23・24
第17図　東面回廊北部状況図（第14・15次調査）……23・24
第18図　東面回廊平面図……23・24
第19図　東面回廊南部・南面回廊礎石位置図……25
第20図　南面回廊東部礎石位置図……26
第21図　南面回廊西部礎石位置図……27
第22図　弥生土器・土師器実測図……29
第23図　須恵器実測図……30
第24図　土師器実測図……31
第25図　玉実測図……31
第26図　須恵器実測図……32
第27図　土師器実測図……32
第28図　土師器・黒色土器実測図……34
第29図　土師器・須恵器・瓦器実測図……35
第30図　瓦器実測図……36
第31図　円面硯・獣脚実測図……37
第32図　軒丸瓦実測図……38
第33図　軒平瓦実測図……40
第34図　軒平瓦実測図……42
第35図　軒平瓦実測図……43
第36図　鴟尾・鬼瓦・ヘラ描き絵画瓦実測図……45
第37図　丸瓦実測図……46

第38図　平瓦実測図……47
第39図　第15次調査出土須恵器・土師器・瓦器実測図……49
第40図　第15次調査出土軒丸瓦・平瓦実測図……50
第41図　第15次調査出土軒平瓦実測図……51
第42図　第16次調査出土弥生土器・土師器・須恵器実測図……53
第43図　第16次調査出土平瓦・丸瓦実測図……54
第44図　河内寺廃寺伽藍配置復原図……55
第45図　河内寺廃寺伽藍平面図……59・60

表　目　次

表1　建物基壇対応表……1
表2　河内寺廃寺跡調査一覧表……3
表3　調査次数別軒丸瓦出土量……39
表4　調査次数別軒平瓦出土量……44
表5　軒瓦対応表……57

図　版　目　次

図版1　遺構　河内寺廃寺跡現況（西から）
図版2　遺構　1．河内寺廃寺跡現況（東から）
　　2．南から塔跡を望む（昭和40年代初め）
図版3　遺構　1．金堂基壇南側石列検出状況（南東から）
　　2．金堂基壇南側石列検出状況（西から）
図版4　遺構　1．金堂基壇南側中央階段検出状況（南から）
　　2．金堂基壇南東隅検出状況（東から）
図版5　遺構　1．溝に切られた金堂基壇南西隅検出状況（南から）
　　2．金堂基壇西側検出状況（北から）
図版6　遺構　1．金堂基壇北側石列検出状況（北東から）
　　2．金堂基壇北側石列検出状況（東から）
図版7　遺構　1．金堂基壇北西隅検出状況（北東から）
　　2．金堂基壇北西隅検出状況（南から）
図版8　遺構　塔調査地全景（上空から）
図版9　遺構　1．塔側柱礎石列検出状況（北西から）
　　2．塔側柱礎石列検出状況（東から）
図版10　遺構　1．塔礎石抜取穴1内礎石抜取痕跡検出状況
　　2．塔四天柱礎石抜取穴北西内礎石抜取痕跡検出状況
図版11　遺構　1．塔創建時基壇検出状況（南から）

2．塔拡張時基壇検出状況（南から）
図版12　遺構　1．塔心柱内土層堆積状況（東から）
2．塔基壇の版築（西から）
図版13　遺構　1．塔創建時基壇南面階段検出状況（西から）
2．塔創建時基壇南面雨落溝検出状況（南から）
3．雨落溝凝灰岩上の墨書検出状況（南から）
図版14　遺構　1．中世仏堂検出状況（西から）
2．中世仏堂検出状況（南から）
図版15　遺構　1．東面回廊礎石列南部検出状況（南から）
2．東面回廊礎石列北部検出状況（北から）
図版16　遺構　1．東面回廊礎石列検出状況（南から）
2．東面回廊基壇と礎石列検出状況（東から）
図版17　遺構　1．南面回廊東部礎石検出状況（北西から）
2．南面回廊東部礎石検出状況（西から）
3．南面回廊西部礎石検出状況（西から）
図版18　遺物　弥生土器壺・甕、土師器甕・高杯
図版19　遺物　土師器甕・鉢・椀・皿、須恵器杯・高杯
図版20　遺物　須恵器杯・壺・円面硯・獣脚、瓦器椀・羽釜
図版21　遺物　瓦器椀
図版22　遺物　1．軒丸瓦
2．軒平瓦
図版23　遺物　軒丸瓦
図版24　遺物　軒丸瓦・軒平瓦
図版25　遺物　軒平瓦
図版26　遺物　軒平瓦・鴟尾・鬼瓦
図版27　遺物　1．平瓦
2．平瓦
図版28　遺物　1．丸瓦・ヘラ描き絵画瓦
2．玉
図版29　遺物　1．第15次調査出土　須恵器杯・高杯、瓦器椀、土師器皿
2．第15次調査出土　須恵器蓋杯・高杯、土師器椀・皿
図版30　遺物　第15次調査出土　軒丸瓦・平瓦
図版31　遺物　第15次調査出土　軒平瓦
図版32　遺物　1．第16次調査出土　弥生土器壺・鉢、須恵器杯・蓋杯
2．第16次調査出土　土師器甑
図版33　遺物　1．第16次調査出土　平瓦・丸瓦凸面
2．第16次調査出土　同上凹面

Ⅰ．調査の経緯と体制

表1　建物基壇対応表

	第1次調査	第2次調査	第11次調査
北基壇	講堂	—	講堂
中央基壇	金堂	講堂	金堂
南基壇	塔	金堂	塔

1）調査に至る経緯

河内寺廃寺跡は、東大阪市河内町において飛鳥～鎌倉時代にかけて存続した寺跡である。伽藍跡と伝える一帯では、早く江戸時代から瓦が表採されてきた。近年まで同様の状態が続いたが、河内町周辺は近畿日本鉄道奈良線の瓢箪山駅の至近距離にあり、昭和30年代から宅地開発や住宅建設が相次いだ。このため遺構の破壊を憂慮する声が強くなり、昭和42年、範囲確認を目的とした第１次調査が大阪府教育委員会により実施された。第２・３次調査も同様の事由により昭和47年度と同48年度に行われた。その後、伽藍内部に発掘のメスが入ることはなく30年が経過した。

平成16年１月、金堂跡と推定されていた基壇跡に、個人住宅が建設されることになり、国庫補助事業に伴う発掘調査を実施した（第11次調査）。後述するように、当該地に遺存状態の良好な塔跡が検出されたため、調査結果に基づき届出者と協議を行い、塔跡は公有化された。その後、地権者の理解と協力を得ながら、塔の周辺地も相次いで公有化され、伽藍の主要部は現状保存が図られることになった。併行して平成17・18年度に保存を目的とする発掘調査を行なった（第14・15次調査）。第14・15次調査は、第１～３次調査で検出した金堂跡と東面回廊跡の再確認を目的としたものであった。この間、塔跡の南側にある南北道路で、排水管埋設工事に伴う確認調査を実施した（第13・16次調査）。道路の幅員で制限された範囲の調査であったが、南面回廊の礎石を検出するなど大きな成果をあげた。

なお、調査の進展に伴い明らかになった基壇建物の呼称が、２度変化した。その対応関係を表１にまとめた。本報告書は、基本的に第11次調査の伽藍配置復原に基づく建物呼称に拠るが、第２・３次調査の成果を記す場合のみ上記の表１に従って、「金堂」（現在は塔と推定）、「講堂」（現在は金堂と推定）のように鉤カッコ付きで記述した。

2）調査組織

第11次調査での塔跡検出に伴い、その周辺地で現状保存を目的とした公有化が進められることになった。また第11次調査地で塔跡が確定したことにより、従来の伽藍配置案を再検討する必要が生じた。このため第１～３次調査で検出した建物跡を再確認し、その性格付けを行うこととなったが、その作業の遂行と調査成果の評価にあたり、学識経験者による第三者機関の設立が急務となった。そこで平成17年11月29日、「河内寺跡調査指導委員会」を設置した。

委員長　大脇　　潔（近畿大学文芸学部教授・東大阪市文化財保護審議会委員）
委員　　森　　郁夫（帝塚山大学人文科学部教授・帝塚山大学考古学研究所所長）
委員　　上原　真人（京都大学大学院文学研究科教授）
事務局　東大阪市教育委員会社会教育部文化財課

当委員会では、文化庁記念物課文化財調査官ならびに大阪府教育委員会文化財保護課技師をオブザーバーとして招聘した。委員会は、河内寺廃寺跡の発掘調査に関する研究を会務とし、

(1) 伽藍配置確定のための発掘調査及び確認調査に関する事項。
(2) 調査成果の分析、評価に関する事項。

について、事務局に指導と助言を行うこととした。

東大阪市教育委員会文化財課では、発掘調査主体として、当委員会に指導を仰ぎながら、第14～16

次調査を実施した。また、伽藍周辺における各種開発工事に伴う確認(試掘)調査においても、適宜現地指導を依頼した。

3）調査方法と目的

第11次調査では、調査地南端にある東西道路に沿って石垣があったため、重機を併用しながら人力でこれを崩し、遺物の採集につとめた。重機の使用は近現代の堆積にかかる土層など最小限とした。また文化庁・大阪府教育委員会の助言を得て、礎石抜取穴などは半截の調査に限定した。第14次調査では、公有化の見通しがついた箇所を対象に、遺構面精査を行なう予定であったが、耕作物の関係で調査地に制約を受けた。第15次調査は、河内寺跡調査指導委員会の助言・指導を受けて、

(1) 第１～３次調査で一部を検出した金堂基壇の規模を確定すること。

(2) 礎石上面の検出にとどまった東面回廊の基壇を確認すること。

を目的として調査を行なった。現状保存の観点から、基壇の断割りは東面回廊の一部を除き行っていない。また礎石据付穴の掘形やピット状遺構についても同様で、遺構面上面での検出作業に留めた。

4）調査の経緯と公有化（第１図　表２）

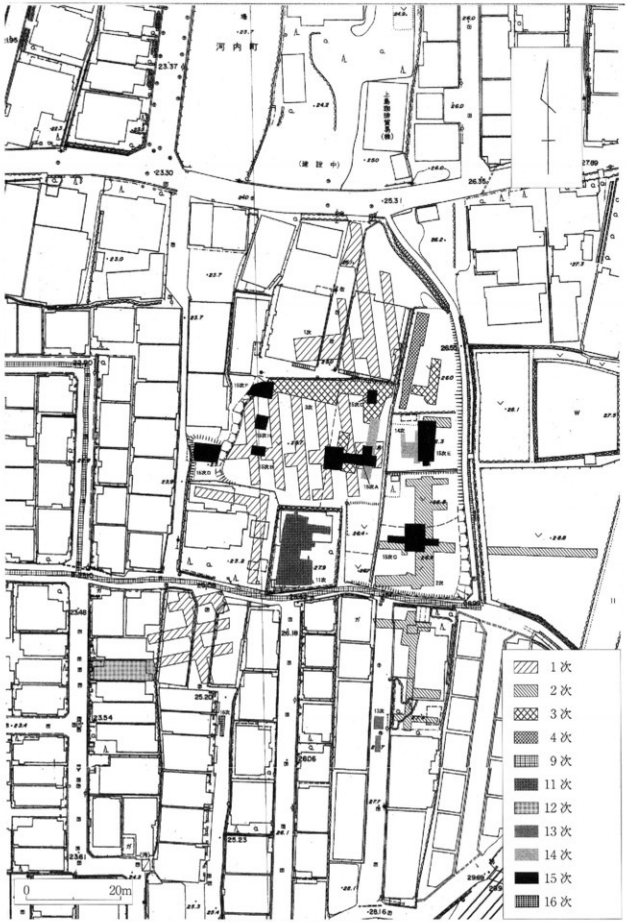
第１～16次までの調査経緯は表２にまとめた。第１次調査において、それまで全く不詳であった河内寺廃寺の寺域・伽藍を把握するためトレンチを設けたが、塔の北方と西方にやや偏る調査となった。この調査時に、金堂基壇の南辺を検出している。第２次調査はその欠を補うべく、塔の東方にトレンチを設定し、東面回廊礎石列を検出した。しかし、回廊基壇は未検出のまま残された。第３次調査では、「講堂」基壇北辺を追求するため、東西に長いトレンチを設けた。その結果、基壇南辺よりも大振りな石列を検出し、北西隅を確認した。第１～３次調査の成果から、河内寺廃寺は基壇規模が軸線を揃えて南北に並ぶ四天王寺式伽藍配置をとると推定された。また、東面回廊の北端で検出した回廊隅の状況と東面回廊の礎石に大小の差があることから、創建当初は「金堂」に取り付いていた回廊が、後に「講堂」に取り付くように改造されたと想定された。しかし、この「金堂」が塔であるという第11次調査の成果を受けて、伽藍配置の再検討が必要となり、塔・金堂の位置が北側にスライドすることになった。さらに、近年全国的に古代寺院の発掘調査が進展し、たとえば大和加守廃寺例のように塔のみを取り囲む回廊が発見されるなど、その取り付きは地方寺院においてバリエーションが豊富であることも知られてきている。第４次調査は金堂基壇の東方のトレンチ調査で、基壇北辺に延長する石敷が確認された。

第５～８次調査は伽藍外の調査である。第５次調査地は寺域の南東にあたり、土石流状の堆積層内から13世紀後半～14世紀初頭の瓦器椀が一括出土している。第15次調査地でも土石流状の堆積層が発見されており、河内寺廃寺の廃絶時期について大きな手掛りを得た。第６・７次調査地は現在皿池遺跡の範囲内となっている。第７次調査で船形塔輪を伴う古墳の周濠が検出されたためで、その結果、遺跡範囲の見直しを行った。第９・10次調査は公共下水道に伴うもので、とくに第９次調査では、塔の南側に東西のトレンチを設定し、塔創建時の軒丸瓦はじめ多量の遺物が出土した。第11次調査以降の調査成果は本文に記すとおりである。このうち第12次調査では、古墳時代中期末に溯る溝の一部を検出した。寺院造営以前には周辺地で該期の集落が営まれていたことが知られた。

第11次調査で遺存状態の良好な塔跡が検出され、その取扱いについて、文化庁と大阪府教育委員会の指導を仰いだ。その後、地権者の理解と協力を得ながら、伽藍内の農地について順次公有化を図ることになった。平成16年度に塔跡（河内町443番地、270.95㎡）、平成17年度に金堂跡周辺（同町441・

表2　河内寺廃寺跡調査一覧表

次数	調査原因	調査地	実施期間	調査面積(㎡)	調査主体	調査成果	調査概報書名（刊行年）	備考
1次	国庫補助事業(範囲確認)	河内町441番地ほか	1967年11月20日～12月26日	不明	大阪府教育委員会	金堂基壇南辺を検出。伽藍外の遺構の有無を調査。	河内寺跡調査概報(1968)	
2次	国庫補助事業(範囲確認)	河内町434～436、685番地	1973年1月～3月	350	東大阪市教育委員会	東面回廊を検出。	河内寺跡(1973)	
3次	国庫補助事業(範囲確認)	河内町437・441番地	1974年1月7日～2月28日	300	東大阪市教育委員会	金堂基壇北辺を検出。金堂基壇南辺を再確認。	河内寺跡Ⅱ(1974)	
4次	個人住宅建設	河内町437番地	1985年11月～（納1週間）	40	東大阪市教育委員会	金堂基壇の東端を調査。	東大阪市文化財協会ニュース2－1（1986）	
5次	共同住宅建設	客坊町714-1,5番地	1987年7月14日～8月20日	123	東大阪市教育委員会	寺域の南東を調査。中世期の土石流状の堆積層を確認。	埋蔵文化財発掘調査概報集1988年度(2)（1989）	
6次	個人住宅建設	河内町458-4番地	1996年8月5日～（日数不明）	51	東大阪市教育委員会	古墳時代の遺物包含層を検出。		現在は県地遺跡の範囲内。
7次	個人住宅建設	河内町458-5番地	1996年9月26日～9月27日	71	東大阪市教育委員会	舟形埴輪を伴う古墳周溝を確認。	1.野利明:東大阪市河内町所在遺地古墳出土の舟形埴輪について（1997）	現在は県地遺跡の範囲内。県地古墳検出。
8次	個人住宅建設	河内町449-14番地	1997年6月2日～（日数不明）	32	東大阪市教育委員会	古墳時代後期の遺物包含層を検出。		
9次	公共下水道管渠築造	本町、河内町	2001年5月11日～6月26日	205	東大阪市教育委員会	塔基壇の南側で場所用の軒丸瓦を含む整地層を検出。遺物多数出土。	東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成13年度－（2002）	
10次	公共下水道管渠築造	河内町669～685番地	2001年10月30日～11月26日	33	東大阪市教育委員会	中世期の整地層を検出。	東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成13年度－（2002）	
11次	国庫補助事業（個人住宅建設のち保存目的）	河内町443番地	2004年3月4日～5月21日	100	東大阪市教育委員会	塔を検出。基壇・礎石を確認。	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成16年度－（2005）	
			2005年2月15日～3月2日				東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成17年度－（2006）	
12次	個人住宅建設	河内町673-23番地	2005年6月9日・6月21日	51	東大阪市教育委員会	古墳時代中期末の溝を検出。	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成17年度－（2006）	
13次	個人排水管理設工事	河内町685番地	2005年8月31日～10月20日	96	東大阪市教育委員会	南面回廊の礎石を検出。	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成17年度－（2006）	調査期間には立会調査分を含む。
14次	国庫補助事業（保存目的）	河内町436・441番地	2006年1月30日～3月30日	45	東大阪市教育委員会	金堂基壇の東端を調査。	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成18年度－（2007）	
15次	国庫補助事業（保存目的）	河内町435・436・441・445番地	2007年3月1日～3月28日	161	東大阪市教育委員会	金堂および東面回廊の基壇を確認。	本書。	
16次	個人排水管理設工事	河内町680番地	2007年3月2日・3月14日	5	東大阪市教育委員会	南面回廊の礎石を検出。	本書。	立会調査として別途3月20日に実施。



第1図　河内寺廃寺跡の調査位置図

442・445番地、1082.26㎡)、平成18年度に東面回廊北部(同町435・436番地、739.61㎡)、合計2092.82㎡が東大阪市土地開発公社により先行取得された。先行取得した土地については、今後、国・府の指導のもと、整備計画を策定し史跡公園として活用していく予定である。

Ⅱ. 位置と環境

1) 寺名

東大阪市河内町の町名は明治20(1887)年成立の河内村に由来するもので、同村内の小字に河内寺(こんでら)がある。このため地元では、小字に所在する寺院跡を河内寺(こんでら)跡と通称してきた。幕末期、庄屋で近在の国学者として著名な中西多豆伎は、寺院跡周辺で瓦を採集し、その付箋に「北ノ瓦ハ(中略)往昔河内寺ノ瓦ナラン」と書き付けている。河内寺の名称は大正13(1924)年刊行の片岡英宗氏著『中河内郡廃寺』にも踏襲されている。本市での埋蔵文化財行政の出発点となった『東大阪市における埋蔵文化財包蔵地の現状』(昭和47年刊)では、河内寺跡(かわちでらあと)として台帳に登録しており、以降この名称を使用し現在まで遺跡保存の種々行政事務を行ってきた。

一方、河内寺という寺号は信頼しうる文献には見られない。史料にない古代寺院跡の遺跡名称としては、現在「所在地名+廃寺跡」が採用される。この場合、河内廃寺跡ないし河内寺廃寺跡とすべきであるが、河内廃寺跡は所在地名が広範囲であるため、河内寺廃寺跡(かわちでらはいじあと)が妥当である。河内寺が古代に遡る歴史的名称でなく、現在、地名に留まることを考慮し、今後、河内寺廃寺跡と呼称する。

2) 位置と周辺の地形(第2図)

河内寺廃寺跡は、東大阪市河内町に所在する古代寺院跡である。寺跡は生駒山地西麓の扇状地に立地する。現在の地表面の標高は27m前後である。

東大阪市の東部は生駒山地の西麓部にあたり、緩やかな傾斜面をなす東麓部と比べ、急峻な傾斜面をなす。このため山あいを流下する小河川が発達している。西麓部のやや南部に位置する客坊谷もその一つである。客坊谷では標高約70mの地点に扇状地の傾斜変換線を認めることができる。扇状地の斜面は標高110～65mの上位面と、20mまでの中位面、6mまでの下位面に区分されている。この区分に拠れば、河内寺廃寺跡は扇状地の中位面に立地することになる。客坊谷の堆積地形は、山地斜面の風化物に由来する崩積性堆積物と客坊谷及びその支谷からの土石流堆積物から構成される。土石流堆積層はその立地環境から幾度となく形成されたものと思われ、これは客坊山遺跡群の調査でも確認されている。河内寺廃寺跡第5次調査の成果によれば、13世紀後半～14世紀初頭の時期にも、大きな土石流堆積があったことが推測される。

3) 歴史的環境

河内寺廃寺跡をはじめとする各時期の遺跡が密集する東大阪市東部は、律令制下の河内国河内郡に相当する。ここでは、河内寺廃寺跡周辺の旧石器時代以降の遺跡概況を総説的に取り上げることは避け、寺院造営前夜となる古墳時代後期から、寺院活動の中心時期となる奈良～平安時代前期までの歴史的環境を見ることとする。

河内寺廃寺跡の南方に広がる山畑古墳群は100基以上を数える市域最大の古墳群である。6世紀後半～7世紀初頭にかけて築造され、主に山麓の尾根上に立地するが、下った扇状地上にも分布してい

る。扇状地の最西端には、瓢箪山古墳（山畑52号墳）があり、南北約50mの双円墳と考えられている。瓢箪山古墳の北約50mの地点で行われた第20次調査では、古墳時代後期前半の竪穴住居・掘立柱建物・環状溝が検出されている。

皿池遺跡は以前から河内郡衙跡と考えられており、河内寺廃寺跡とともに河内郡大宅郷に推定されている。第３次調査（第２図▲３）で飛鳥～平安時代にかけての遺物や小規模な掘立柱建物などが発見されている。平成17年度に実施された第７次調査（第２図▲４）では、古墳時代中期末の総柱建物が１棟検出された。総柱建物は河内寺廃寺跡に近接することから、寺院が創建される以前の在地豪族居宅とも考えられる。河内町458番地（第２図▲５）では、皿池古墳が発見された。周溝から船形埴輪が出土したため、被葬者は外洋の水運や軍事・外交に係わる豪族が推定され、河内寺廃寺の建立者である河内直（連）との結びつきを強く示唆する。また、第２図▲５に面する道路下では、平成18年度の下水道工事に伴う皿池遺跡第８次調査で、渤海三彩片が出土した。三彩陶は寺院・官衙・古墓からの出土例が多く、河内寺廃寺あるいは河内郡衙と関連深い資料と思われる。

以下、河内寺廃寺跡周辺で、明確な遺構を伴う奈良～平安時代の集落跡を概観する。まず、神並遺跡（第２図▲１）では、掘立柱建物・溝・柵列・井戸・土坑が検出されている。「池」「長福」と書かれた墨書土器が伴出している。鬼塚遺跡（第２図▲２）では、掘立柱建物・溝・土坑・井戸が発見され、「氏」と書かれた墨書土器が30点出土したほか、多量の該期の遺物が出土した。船山遺跡（第２図▲６）では、木組みの井戸から墨書土器や土師器杯・須恵器大甕などが出土した。土師器杯は９世紀前半に属する。これらの集落が示す様相から、神並遺跡は律令制下の大戸郷、鬼塚遺跡は額田郷、船山遺跡は桜井郷にそれぞれ比定できる。また、墓尾古墳群の西方では、昭和53年に火葬墓が発見されている。所用の蔵骨器は土師器杯と蓋のセットで８世紀前半に属する。

東大阪市の東部には、延喜式内社が数多く分布する。出雲井町の枚岡神社は河内国一宮、旧官幣大社で現在の祭神は天児屋根命・比売命・経津主命・武甕槌命の四神である。天児屋根命は記紀神話では中臣氏の祖とされている。当地に勧請したと伝える半島連は中臣氏と関係の深い氏族で、当社が鎮座する河内郡豊浦郷は中臣氏・藤原氏の本拠地の一つで、そのため、「元春日社」の別称が伝わる。東石切町１丁目の石切劔箭神社は旧村社で、鵜速日命・可美真手命の二神を祀る。このほかに、北から大津神社（水走２丁目）・梶無神社（六万寺町３丁目）がある。古代寺院跡も多い。日下町２丁目の石凝寺（石凝院）跡は、『行基年譜』所載の行基建立四十九院の一つで、養老４（720）年建立と伝える。『続日本紀』宝亀４（773）年11月辛卯条に、他院とともに石凝院の名が見える。昭和36年の小規模な発掘調査により基壇の一部が発掘され、石凝寺跡に比定された。雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦と平城宮式の軒平瓦が出土した。石切劔箭神社境内の法通寺跡は、昭和59年に発掘調査が実施され、南北に並ぶ二つの乱石積基壇建物と、東面回廊と推定される石列が発見された。基壇の一つは東西12.6m、南北11mの規模があり、創建時の瓦は、鏡面文縁複弁蓮華文の藤原宮式軒丸瓦である。『山槐記』応保元（1161）年の記事から、法通寺は平安時代後期には興福寺の末寺に入っていたと推定されている。その後、法通寺は興福寺西金堂領の荘園「法通寺庄」として、室町時代の記録に散見し、大きく発展したらしい。

河内寺廃寺跡の東方には、客坊廃寺が所在する。寺号は現在不詳であるが、付近を描いた山絵図には「法性寺」と寺名が記されている。客坊廃寺は標高75～110m前後に立地する山岳寺院である。調査は局部的ではあるが、斜面を雛壇状に造成し、石垣を積んで整地した各平場に、瓦葺建物の基壇、礎石、掘立柱建物、小規模な園地、石組穴蔵などが検出されている。10世紀代の黒色土器の台付壺を用いた蔵骨器と火葬墓が発見されており、時期的に河内寺廃寺に関係した人物のものとする説もある。文献史料からは南山城の浄瑠璃寺と関係する天台系寺院であったことが知られている。出土した瓦は

第２図　河内寺廃寺跡とその周辺の遺跡　※▲は調査地点

平安時代後期～鎌倉時代のものが主体を占め、室町時代のものも認められる。寿永２(1183)年、和泉国大鳥郡の瓦大工が丸・平・軒丸・軒平の各種瓦を製作したことを記した軒丸瓦があり、河内・和泉の瓦生産を知る上で重要な資料である。河内寺廃寺跡の単弁十三葉蓮華文軒丸瓦（ＫＷＭ２－白凰～奈良時代）が客坊廃寺で、客坊廃寺の均整唐草文軒平瓦（ＫＷＨ９－平安時代後期）が河内寺廃寺跡で、それぞれ出土しており（表４）、平安時代以降、二寺間に強いつながりがあったことが窺える。

Ⅲ．調査の概要

１）発掘調査前の河内寺廃寺跡

前述のように、河内寺廃寺跡の周辺は、江戸時代後期から古瓦が採集されることで注目を集めてきた。大正13（1924）年、片岡英宗氏は旧中河内郡（現在の東大阪市・八尾市・柏原市・松原市）の廃寺についてまとめた『中河内郡廃寺』を刊行し、その中に、

河内寺　　河内

村の西北に字河内寺あり。その地一畝余にして土地自ら高く、伝えて伽藍の址と云ふ。その附近の田圃より多く古瓦破片発掘せらる。当寺は行基の開基にて巨刹なりしが、南北朝以降屢兵火に災せられ、遂に天正の頃ほひ廃滅せしなりと云ふ。

と紹介している。行基の開基や天正の廃滅の当否は措くとして、「その地一畝余にして土地自ら高く」とある宅地は、平成15・16年度調査で検出された塔跡そのものを指しており、周辺より一段高い土地が、伽藍堂塔の中心にあたることが長く認識されてきたことがわかる。

昭和30年代まで寺跡周辺は東から西へ傾斜する棚田が広がっていた。当時の地図からは、水田地帯の中央に、土壇に載った宅地が一軒のみ、島状に孤立している状況が窺われる。旧枚岡市教育委員会刊行の啓発冊子、郷土誌『ひらおか』、『枚岡市史』などの刊行物には必ず河内寺廃寺跡が取り上げられ、河内国河内郡の中心に位置する古代寺院として研究の対象とされてきた。因みに、『枚岡市史』第３巻史料編一の図版写真には、棚田の境界に位置する石垣の用材として、礎石状の巨石が映っている。このことから、水田の地下には何らかの建物基壇があるものと予想されてきた。

２）第１次調査（昭和42年度）

寺跡の西方から徐々に宅地開発が進行し、伽藍中心に迫る勢いが昭和40年代初頭から顕著になった。このため遺構の有無など、考古学的な知見を得るための寺域の範囲確認調査が急務となった。当初は寺域全体に発掘の鍬を入れる予定であったようだが、地権者の同意が万全でなく、調査トレンチは塔跡から見て北方・西方・南西方に限られた。

西方・南西方のトレンチでは撹乱が激しいことが、報告書に記載されている。塔跡とその西側宅地とを区切る石垣は２m以上の高さがあり、石垣造成や整地の折に大きく削平されたものと推定している。ただし、『枚岡市史』には、なだらかな斜面を石垣で区画する際に、多量の瓦片が出土したことが伝えられている。

北方のトレンチでは、中央基壇（この語は表１による）の南辺石列を検出したが、北辺石列は検出できなかった。これは基壇が残る水田の北端に石垣があり、掘削できなかったことによるもので、第３次調査では中央基壇北辺を確認した。中央基壇を検出したトレンチのさらに北側にも調査区を設け、南に張り出す基壇（北基壇）を検出したと報告されている。全体として種々の制約を受けた調査で初期の目的は達成されなかったが、塔跡の土壇、中央基壇、北基壇の三つが南北一直線に並ぶ特徴から、

四天王寺式伽藍配置をとるものと推定された。

出土した軒瓦のセット関係については、端瓦第1形式〔素弁八葉蓮華文軒丸瓦－三重弧文軒平瓦〕、端瓦第2形式〔単弁十三葉蓮華文軒丸瓦－変形重弧文軒平瓦〕、端瓦第3形式〔単弁十二葉蓮華文軒丸瓦－偏行唐草文軒平瓦〕、端瓦鎌倉形式〔均整唐草文軒平瓦〕という分類が行われた。この調査以降、新種の軒瓦が出土し、セット関係も再検討を行うことになったが、軒瓦の基本的な枠組みはこの第1次調査で示され、その大綱は現在でも有効である。出土遺物にはほかに、土師器・須恵器・瓦器などの土器類、須恵質の仏像脚部、銭貨などがみられた。出土瓦の時期から、河内寺廃寺は飛鳥時代後期に創建され、鎌倉時代まで存続したと推定された。

こうした考古学的知見に基づき、第1次調査の報告書では建立氏族の検討が行われている。まず、『和名類聚抄』記載の河内郡の郷名比定から、現在の河内町が大宅郷にあたり、「おおやけ」の語意から周辺に郡衙が存在したと推定した。その上で河内寺廃寺は郡領の経営に係る郡寺の性格をもつことを推定している。河内郡の郡領は『日本三代実録』貞観4（862）年の記事に見える河内連田村麻呂など河内直（連）一族であることから、建立氏族も同氏と認定された。このように、第1次調査では河内寺廃寺についての基本的な知見が得られた。

3）第2次調査（昭和47年度）

宅地開発はさらに進行し、南基壇周辺には人家が建て込む状況となった。第1次調査では上記のように調査地に制約を受けたため、南基壇の東方について、伽藍の状況を把握する必要が高まった。これを踏まえて、第1次調査の成果を補完する形で第2次調査が実施された。

調査の結果、南北57.7mに及ぶ礎石列が検出された。第1次調査で推定した伽藍配置から、この礎石列は東面回廊であることが確実視された。なお、礎石列の延長については第15次調査の結果を受けて次章で修正している。また検出した礎石の規模が南基壇の南端を横切る東西道路を挟んで、南側が大きく、北側が小さいことが注意され、それぞれの礎石列に時期差があると推定した。すなわち、南北トレンチ中央の礎石位置から1間分西にずれてL字状に回廊が屈曲し、第1次調査検出の建物基壇（中央基壇）南辺に取り付くように改造したと推定したのである。しかし、第2次調査においても調査地に制限を受け、検出した礎石列は桁行方向の1列分にとどまり、梁行は一部しか確認されていない。さらに、回廊の取り付きの状況から伽藍配置の見直しが行われ、南基壇を「金堂」、中央基壇を「講堂」に推定した。このときに示された伽藍配置復元案は第11次調査まで踏襲された。

出土した軒瓦のセットは第1次調査から増加し、第Ⅰ形式から第Ⅵ形式まで設定された。新種瓦の検討から、平安時代前期・後期の差し替え瓦が抽出された。回廊跡からの出土遺物ではないが、回廊の東方の池造成工事で発見された古墳時代の土器が紹介され、寺院造営以前に、古墳時代の集落などが存在したことが予想されている。

4）第3次調査（昭和48年度）

第1次調査で未検出であった中央基壇の北辺に伴う石列が工事中に発見されたことをうけて、第3次調査が実施された。併せて中央基壇南辺の石列の状況を再確認した。

基壇北辺の石列は8個分検出された。石の大きさは基壇北辺と南辺とでは異なり、北辺は60～80cm大と巨大であった。ただし、調査時の所見では、基壇北辺石列の裏込めは工事中に削られ、傾斜面をもっていた。基壇隅は、北西部と北東部を確認している。この位置は第15次調査によっても確認されている。さらに東面回廊から北延長上にトレンチを設けた。この結果、第2次調査で検出した落ち込

みが、ここまで続き、大きく広がっている状況が確認された。このことから少なくとも東面回廊はこのトレンチまでは延びておらず、トレンチの南側で北面回廊が建物基壇に取り付くと推定できるようになった。伽藍の様相を窺う重要な成果であった。

出土した軒瓦のセットは、第Ⅰ形式から第Ⅴ形式に区分された。注目される遺物に円面硯がある。円面硯の出土は都城・官衙・寺院などに限られ、河内寺廃寺所用品として貴重である。

第３次調査では、条里の検討から寺域規模を復原し、東西１町、南北１町半と推定している。寺域復元は今後の河内寺廃寺跡の調査において重要な課題となる。

以上が第１～３次調査までの成果の概要である。16次にわたる調査の結果、建物基壇の比定は、第１次調査時における復元案が正鵠を得ていたことが判明した。次章では伽藍内の建物別に、これら３次の成果を活用して検討を加えることにしたい。

Ⅳ．伽藍内施設の調査

１）金堂（第１次・３次・15次調査　第３図）

中央基壇の建物は、乱石積基壇をもつ金堂と判明した。基壇の規模は東西23.1m(77尺)、南北15.0m(50尺)である。基壇化粧の石積は南辺西端を除き１段分しか遺存せず、現存の基壇高は0.3mである。基壇の南北軸線は座標北から約3.5°東に振れる。これは塔と同様で、伽藍の中軸線と見做すことができる。第１・３次調査は建物基壇の存否確認に主眼が置かれ、規模確定の要件となる基壇外の雨落溝や犬走りの痕跡は検出されなかった。第15次調査ではこの点を考慮し、河内寺跡調査指導委員会の指導を得て、基壇南辺部分で一部深掘りを行い、その追求に努めた。

以下では、第15次調査の成果を中心に金堂基壇の各部について説明を加えていきたい。なお、第15次調査では、金堂の礎石やその抜取穴の検出は行っていない。従って金堂の建物規模については今後の検討課題となる。

基壇南辺～東辺(第15次調査Ａ・Ｂ地区　第４・７図)

層位は次のとおりである(第１・２層は第15次調査各地区で共通するため以下記述を省略する)。

第１層　7.5GY4/1暗緑灰色シルト質細粒砂。現代の耕作土層。

第２層　2.5Y4/4オリーブ褐色シルトに10Y4/2オリーブ灰色シルトがブロック状に混入する層。

第１次調査の埋戻し土。他の地区では過去調査の埋戻し土と現代の床土層を含めて第２層とした。

第３層　10Y3/1オリーブ黒色中礫混じり極粗粒砂。土石流状の堆積層。

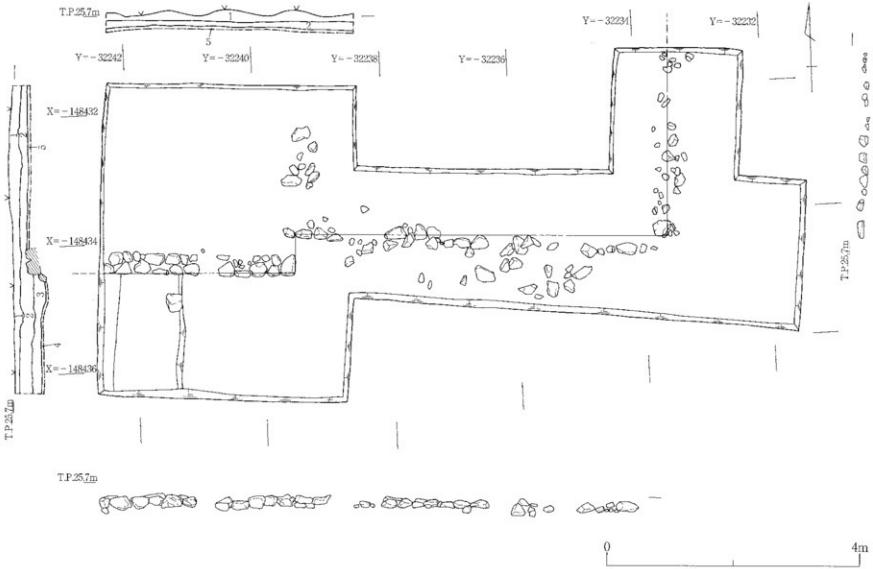
第４層　7.5Y3/2オリーブ黒色細礫～粗粒砂。

第５層　5Y5/4オリーブ色中礫混じりシルト。基壇上面の構築層。

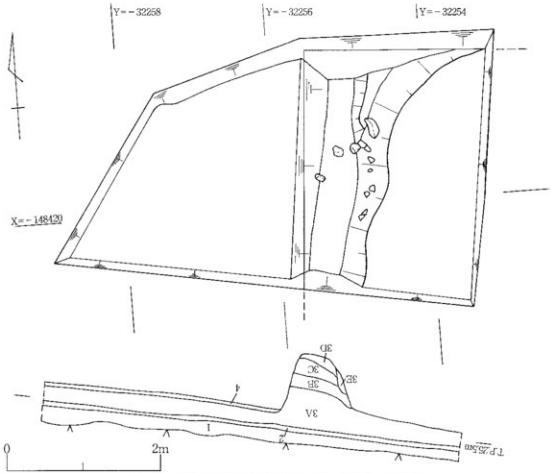
Ａ地区では第１次調査で最も遺存状態の良好な基壇南辺をまず確認した。基壇南東隅を確定するため東へトレンチを拡張した。トレンチ西壁から30cm前後の石を南北２列に敷き並べた石列は東３mで北に0.6m(２尺)屈曲する。本来の基壇南辺はその北側のラインにあたり、南への張り出し部である。張り出し部の石列上面は半出に揃えられており、原位置を保つ。石列の間隙には拳大の石を交える。第１次調査分と合わせて東西11.4m(38尺)を測る。基壇周囲の犬走りや雨落溝、重成基壇、基壇の改作痕跡などの可能性も検討したが、張り出し部で内側の基壇石列が無くなること、張り出し部両端が基壇(伽藍)中軸の対称位置に合致することから、長大な南面石段と判断した。ただし、このように長大な石段は古代寺院の金堂に例はなく、今後さらなる検討を要する。基壇南辺の石列は石段との接点から約5.8m東へ延びる。南辺東端には長辺を南東側に向ける石があり、この石から平坦面をもつ石

Y=−32255
Y=−32250
Y=−32245
Y=−32240
Y=−32235
X=−148420
X=−148425
X=−148430
X=−148435
基壇北辺石列
瓦溜
基壇南辺石列
0
5m

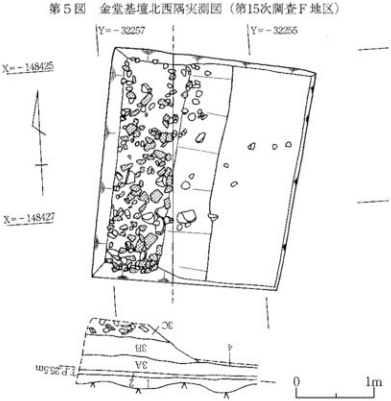
第３図　金堂基壇平面図



第４図　金堂基壇南辺・東辺実測図（第15次調査Ａ地区）

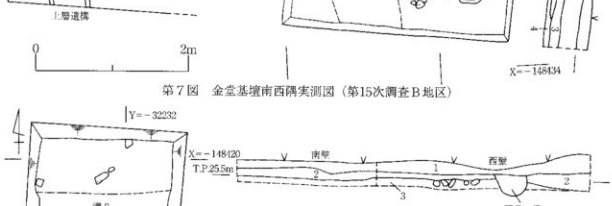


第５図　金堂基壇北西隅実測図（第15次調査Ｆ地区）



第６図　金堂基壇西辺中央部実測図（第15次調査Ｈ地区）

第７図　金堂基壇南西隅実測図（第15次調査Ｂ地区）



第８図　金堂基壇北東部実測図（第15次調査Ｇ地区）

が屈曲することから、その地点が基壇の南東隅と判明した。

基壇南辺の石列は石段との接点から約２ｍまでは石の平坦面のレベルを保ち、原位置に留まっていたが、その地点から南東隅にかけては欠失した石が多く、また平坦面が南へ傾斜していた。この箇所の石列は現地表面下0.15ｍと浅く、近年の耕作により石列が乱れたことが窺われた。南辺石列の石材は石段より小振りで20cm前後を測るものが多い。基壇南辺石列の東端上面は25.59ｍ（T.P.値。以下同じ）、西端石段上面は25.40ｍで約0.2ｍの比高をもつ。基壇石材は１段分しか遺存しないため基壇本来の上面は確定しないが、この点からみて金堂基壇の東側は旧地形の傾斜面に沿って造築されたことが知られる。なお、基壇南辺の石列は局部的に南北２列をなす箇所が認められ、造営当初は２列を単位としていたことがわかる。基壇東辺は南東隅の石から20cm前後の石が点在すること、根石とみられる拳大の石の群集があることから復元できた。東側に石垣が近接しその造成時に石が移動されていることから、南面石段・基壇南辺と比べて遺存状態は悪い。

基壇外には石材が移動したものを含めて土石流状の堆積層がある（第３層）。特に南面石段の南側では第３層上面で多量の瓦片が集積していた。瓦片の下部でＫＷＭ２の単弁十三葉蓮華文軒丸瓦が出土した。トレンチ西端で第４層の上面まで掘り下げた。第４層上面のレベルは25.25ｍで、後述の塔基壇外犬走り上面の25.28ｍと近似する。このことから第４層上面が旧地表であることがわかる。南面

石段際には浅い凹みが見られるが雨落溝とは考えられない。第３層から土師器・瓦器の細片が出土している。過去の第５・14次調査の成果を勘案すると、第３層の堆積時期は14世紀初頭と考えられたため、金堂はそれ以前に廃絶したことがわかった。

基壇の南西隅を確認するため、金堂基壇中軸線で折り返し、Ｂ地区を設定した。南西隅の推定箇所には金堂廃絶後の溝が斜行するため、南西隅は西辺との交点に求めた。斜行溝の東側には基壇南辺の石列が遺存していた。耕作等による後世の撹乱により乱れていたが上下２段の石列が確認できた。西端石列からの平坦面までの高さは25.38mである。南東隅とは0.2mの比高差を保つことから、基壇南辺の中央部と大きく変化せず、安定したレベルを示していることがわかった。

基壇北辺～東辺(第15次調査Ｆ・Ｇ地区　第５・８図)

第３次調査では原位置を保つ径60～80cmの石を８個検出した。トレンチ北側に現在の石垣が迫るため、第15次調査では基壇北西隅の確認に留めた。位置関係から第３次調査での北辺石列は石垣直下に遺存していることが知られる。Ｆ地区の層位は次のとおりである。

第３層　土層の色調は同一のため全て第３層とし土質で５層に細分した。

第３Ａ層　7.5Y4/1灰色シルト質中粒砂。金堂廃絶後に広くトレンチを覆う層。

第３Ｂ層　7.5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。第３Ｃ層　7.5Y4/2灰オリーブ色シルト。

第３Ｄ層　7.5Y4/2灰オリーブ色中礫混シルト。第３Ｅ層　7.5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。

Ｆ地区では第４層が北側及び西側へ傾斜する箇所が認められ、基壇北西隅が確認できた。傾斜面は緩やかに弧を描き、基壇の石列は全て抜き取られていた。わずかに基壇石列の根石とみられる石の集積が遺存していた。第４層の断割りは実施していないが、第３次調査で推定されているように、出土遺物から第４層の造成時期は平安時代後期を溯らないものと思われる。

基壇北東隅の確認のため、第15次調査ではＧ地区を設定したが、前述のように北面と東面にある現代の石垣の造成のため明確な基壇隅は検出できなかった。ただし、第３次調査で推定されている北東隅とその東辺の方向がＡ地区の基壇東辺の方向と一致し、中軸線の東への折り返しとも矛盾しないため、基壇東辺を確定することができた。

金堂基壇の南辺と北辺では、基壇石材の大きさがかなり異なる。現在でも金堂から講堂推定地にかけて大きく傾斜しており、第３次調査で推定されているように、旧地形に対する整地に由来することが考えられる。

基壇西辺(第15次調査Ｈ地区　第６図)

西辺の確定のためＢ地区とＦ地区の中間にＨ地区を設定した。

層位は第１～３Ｂ層まで共通。第３Ｃ層は５Y4/2灰オリーブ色シルトで瓦が多量に出土した。

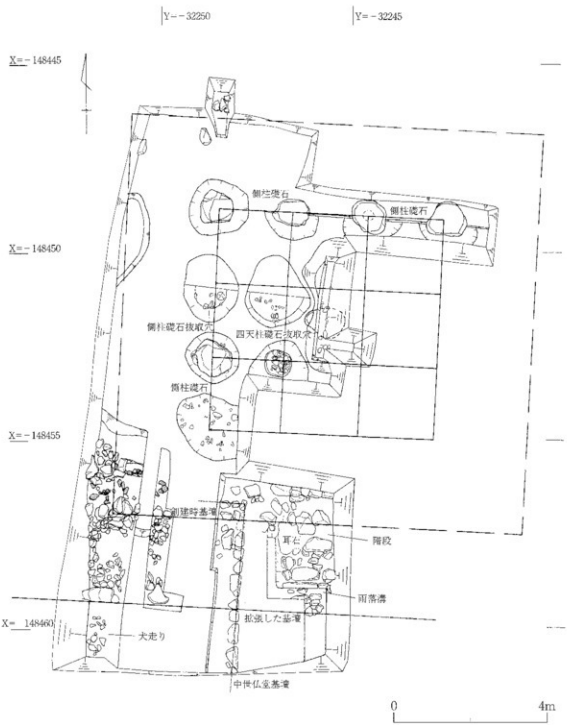
Ｈ地区ではＦ地区で検出した第４層上面の傾斜面を追求した。その結果全体に西側に傾斜することが認められた。傾斜の上～中位面(３Ａ・３Ｂ層)ではほぼ無遺物であったが、下位面(３Ｃ層)では瓦溜を検出した。Ｆ地区と同じく基壇石列は欠失していたが、瓦溜で東端の瓦の位置がほぼ南北方向に連なり、西辺の推定箇所と一致したため、基壇の西辺を確定することができた。

第４層上面のレベルはＦ地区で25.35m、Ｈ地区で25.45mを測る。これはＢ地区の基壇南西隅と同じ数値を示しており、基壇中軸線付近より西側では同レベルを保っていることが知られた。このことは、旧地形の傾斜面からみて、基壇の西側で伽藍造成時の整地を裏付けるものとみられる。

２）塔(第11次調査　第９～11図)

南基壇の建物は塔である。乱石積基壇で、創建時の規模は一辺10.7m(約36尺)、礎石上面から基壇

外犬走りまでの基壇高さは1.4mである。創建時基壇の南方には別個の基壇がある。これは奈良時代ごろに2.4m（8尺）南へ拡張したものとみられる。側柱では、東西列で4個、南北で1個の礎石を確認した。12個の礎石のうち、5個を確認したことになり、礎石の遺存状態はきわめて良好である。塔初重は等間の3間で柱間寸法は1.95m（6.5尺）を測る。塔の中軸線は金堂と同じく座標北に対して約3.5°東に振れる。塔を検出した第11次調査の層位は以下のとおりである。

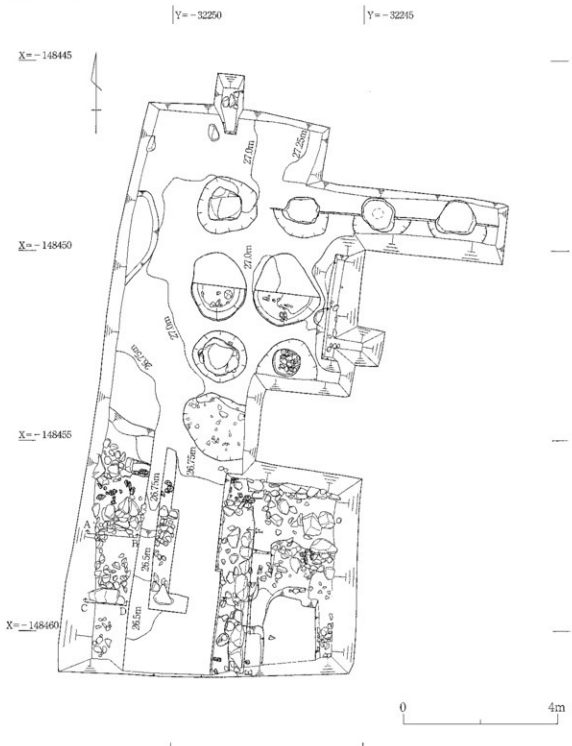


第9図　塔平面図

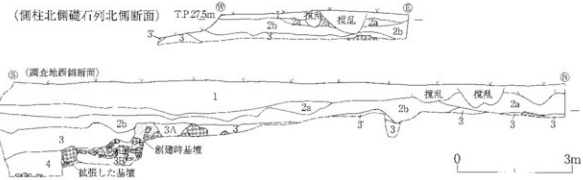
第１層　現代の盛土。

第２層　拳大の礫の層間に多量の瓦片を含む瓦礫層。上下２層に区分できた。

第２ａ層　2.5Y3/2黒褐色中礫混じりシルト。下部の第２ｂ層に比べて礫の混入がやや疎らで、礫間の夾雑物がシルト～細粒砂層。飛鳥～奈良時代の瓦を主体に、微量の近世の陶磁器片を含む。江戸時代の盛土層である。

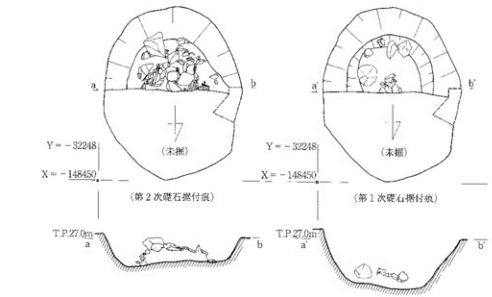


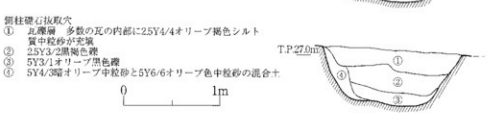
第10図　塔基壇・礎石実測図



1　盛土　2a　瓦礫層（上層）　多数の瓦の内部に2.5Y3/2黒褐色中礫混じりシルトが充填
2b　瓦礫層（下層）　多数の瓦の内部に7.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルトが充填
3　2.5Y3/3礫オリーブ褐色シルト・5Y4/2～2.5Y4/2灰オリーブ色～暗灰黄色シルトで粗粒砂～細礫を含む
3'　第3層と同色、同質で焼土粒・炭化物を多量に含む
3A 5Y4/2灰オリーブ色中礫混じりシルト　3B中礫を基軸に2.5Y4/2暗灰黄色シルトが嵌入
4　（上層）2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト　（下層）N4/0灰色粘土質シルトで炭化物を多く含む

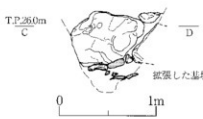
↑第11図
塔土層断面図



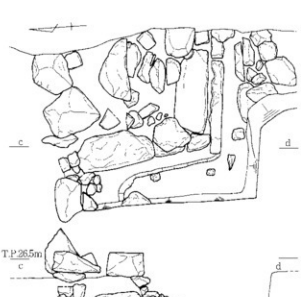


←第12図
傾柱礎石抜取穴実測図

第13図　中世仏堂基壇立面図



←第14図　塔基壇立面図



第15図　塔南面石段実測図

第２ｂ層　7.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト。礫混入は密で、夾雑物は粗粒砂ないし細礫層。飛鳥～奈良時代の瓦を主体に中世の遺物と近世の陶磁器を含む。宅町時代中期～江戸時代の盛土層。

第３層　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト・5Y4/2～2.5Y4/2灰オリーブ色～暗灰黄色シルトで粗粒砂～細礫を含む。基壇上部では第２層の下層を広く覆う。次の各層がある。

第３'層　基壇上部で第３層の上面に介在し、焼土粒や炭化物を多量に含む層。基部になる土質は第３層と同一であるため第３'層としている。後記の中世仏堂の焼失に伴い堆積した層である。上面は礎石抜取穴の遺構面、下面は礎石掘形の遺構面をなす。

第３Ａ層　5Y4/2灰オリーブ色中礫混じりシルト。創建時基壇の背後に位置する裏込め土。多量の瓦を包含する。

第３Ｂ層　2.5Y4/2暗灰黄色中礫主体で同色シルトが混入する層。創建時基壇と奈良時代基壇の間隙に位置し、上面は中世仏堂築造に伴う基壇面(整地面)を形成する。

第４層　上層2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト、下層N4/0灰色粘土質シルトで炭化物を多く含む。奈良時代基壇廃絶の直後に堆積した炭化物層。第４層の除去後犬走りが検出された。犬走りの礫間で、退化した「て」の字状口縁をもつ土師器皿が出土した。

第５層　基壇の版築十層。付近に良質な粘土が得にくい環境からか、細粒砂層とシルト層、中礫層が互層となるように、版築を行なっていることが観察できた。

基壇と礎石(第12・14図)

乱石積基壇には、30～40cm前後の角礫を積む創建時の基壇と、奈良時代ごろに南に拡張した60～70cm前後の角礫を配する基壇とがある。創建期基壇には石材の崩落があり、この基壇に伴う雨落溝の上部に奈良時代基壇の石材の堆積が認められる。さらに創建時基壇最下部の基面より奈良時代基壇最上部基面は0.4m高い。このことから、塔創建期基壇は上部の基壇であり、天災などにより基壇石積みが緩んだため、基壇を拡張したことが考えられる。ただし、奈良時代基壇の石材据付に使用した瓦は創建時の平瓦であり、創建時基壇から奈良時代基壇への大きな時期差は想定できず、比較的短期間に創建時基壇をもとに補修したことが窺われる。

側柱礎石抜取穴の半截調査後、上面下面の２時期の礎石掘付痕跡を確認した。これと抜取穴の検出面の関係から塔の解体修理が行われたことが知られた。抜取穴内の層位は第12図のとおりである。四天柱は検出した２基とも礎石は抜き取られていた。北西の抜取穴では掘付痕跡は不明瞭であった。礎石抜取の時期は、後述の中世仏堂基壇の廃絶後と考えられ室町時代後期ごろである。また径70cmを測る心柱の痕跡が検出された。第５層下1.5mまで掘り下げたところ、空洞部を確認したため心柱痕跡と考えられた。安全を確保する観点から今回は心礎確認を断念したが、心礎は地下式で今回確認した深度よりさらに下方に遺存しているものと思われる。

南面石段と雨落溝(第15図)

南側柱列の第２石と第３石の中間で、南面階段を検出した。３段以上の踏石のうち、２段分が遺存していた。雨落溝の凝灰岩に接する踏石は、一辺90cmを測る。塔創建時のものである。耳石は、西側箇所を確認した。基壇が乱石積であるため、耳石も自然石を利用している。基底部のみ確認したが、基壇側には一辺約90cmを測る巨石を用い、その高さを基準として、地表面側に行くに従い、石の高さを減じる工夫をしている。第２石の南延長線上に西側耳石がくるため、階段の幅は柱間１間分(1.95m)と推定される。拡張した基壇に伴う階段は東側にずらして造られていると考えられる。

階段の直下で凝灰岩の切石を使用した雨落溝を発見した。雨落溝の幅は凝灰岩の内法で12cmを測る。凝灰岩上面から深さ13cmまで確認した。凝灰岩外面の一辺には墨書が施されていたが、字形は不明である。創建時階段の西列に沿って凝灰岩の抜き取り跡も見つかり、基壇長が確定した。また階段部西側の第３層各層から土師器杯が密集して出土した。

中世仏堂とその基壇(第13図)

階段の北方と西方で中世の仏堂に関わると思われる基壇を検出した。規模等は不明である。基壇の軸線は塔礎石のそれとは合わないこと、一部箇所を掘り下げたところ、この基壇の下面から奈良時代基壇の石材が認められたことから中世の所産と判明した。中世仏堂基壇の上部に堆積する焼土層出土土器から、この仏堂は室町時代まで存続したことが判明した。また断面観察から、創建時基壇と奈良時代基壇の間にほぼレベルを同じくして角礫を一直線に揃える箇所が認められた。この礫上面は創建時基壇を再利用し、中世仏堂構築の整地面をなすことが判明した。

塔から出土した軒瓦のうち量的に多いのは、単弁十三葉蓮華文軒丸瓦(ＫＷＭ２)－変形重弧文軒平瓦(ＫＷＨ２)のセットで白鳳時代に属する。これが塔創建年代を示す。一方、内区の蓮弁間に珠点をもつ複弁蓮華文軒丸瓦(ＫＷＭ４)は京都市の円勝寺跡比定地内出土例と同笵で、偏行唐草文軒平瓦(ＫＷＨ７)と組み合う。ＫＷＭ４は11世紀後半に属し、少なくとも該期まで塔は存立していたことがわかる。基壇外で出土した土師器皿は12世紀後半の所産であり、側柱の礎石間で焼土面が認められることから、そのころには塔は焼失したものと考えられる。

３）東面回廊(第２次・15次調査Ｃ地区　第18図)

礎石の遺存状態の良い東面回廊を検出し、総延長で49.8mを確認した。梁行は3.0m(10尺)の単廊である。北端の礎石を第１石として順次２石、３石…と仮称すると、第１～14石までは3.0m(10尺)の等間となっているが、第14～18石までの４間は2.7m(９尺)となっており、桁行の南北方向に差があることが知られる。第２次調査では調査区の設定に制約があり、礎石列は確認されているが基壇は未検出であった。このため第15次調査では梁行の礎石が検出された北側にトレンチを設定し、再調査を行った。

東面回廊基壇(第15次調査Ｃ地区　第16図)

層位は以下のとおりである。

第３層　5Y4/2灰オリーブ色細礫混じりシルト。

第４層　5Y3/2オリーブ黒色中礫混じり細粒砂。

第５層　7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質細粒砂。中礫を含む。回廊基壇の構築土である。基壇の東側ではこの層を切り込んで雨落溝の痕跡である溝状の凹みがある。溝状凹みの堆積層を５'層・５"層とした。

第５'層　7.5Y4/3暗オリーブ色粘土混じり細粒砂。中礫を含む。

第５"層　第６層を主体に7.5Y4/3暗オリーブ色中礫が混じる。

第６層　N4/0灰色粘土。基壇トレンチの東端でのみ確認。上面は伽藍外の旧地表となる。

Ｃ地区では３個の礎石を確認した。東列礎石のうち北をＡ石、南をＢ石、Ｂ石の西をＣ石と呼称する。Ａ石西側の礎石は後世の撹乱のため失われている。礎石据付穴は上面を検出したに留めている。Ａ石は東西41cm、南北60cm、据付穴は隅丸方形を呈し、東西85cm、南北94cmである。Ｂ石は東西56cm、南北57cm、据付穴は隅丸方形を呈し、東西81cm、南北82cmである。Ｃ石は東西49cm、南北74cm、据付穴はやや不定な楕円形を呈し、東西91cm、南北104cmである。据付穴内に根石として30cm大の石を使用している。近年の耕作時にとりあげられたもので、礎石下の根石も遺存していなかった。

礎石間の距離は写真測量による図面で検討した結果、桁行、梁行とも3.0mで、礎石心を結ぶ方位は伽藍中軸線に正しく平行する。第２次調査で報告した礎石心々距離2.95mという数値を訂正しておく。南西・南東礎石間と東西に拡張したトレンチで回廊の基壇を検出することができた。基壇ラインは礎石心々から東西とも2.1m（７尺）を測る。このうち伽藍外に向く基壇東辺では、大振りな石材は使用せず、拳大の石を基壇側面に貼り付けて化粧としている。河内寺跡調査指導委員会の指導を得て、基壇東辺の壁面北側に幅20cmのサブトレンチを設定した。断面を観察すると、基壇側面から内側の構築土にかけて裏込めに使用した石と瓦の集積が認められた。また、礎石据付穴には根石ないし根回りの代用として瓦片を使用しており、現況の基壇は創建時のものではないことがわかる。

基壇の東側では雨落溝の痕跡にあたる溝状の凹みを検出した。凹みは幅60cm、深さは18cmを測る。この東に接してピットがある。ピットは径30cmを測り、埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土である。基壇上面から凹み底面までの高さは26cm、基壇外の凹みの高さは14cmである。基壇西辺の段差は伽藍内に向くためか、東辺に比べて明確ではない。雨落溝ないしその痕跡も発見されなかった。わずかに拳大の石と平坦面を外に向けた大振りな石とからなる南北石列の下面で緩やかな傾斜面がみられたのみである。傾斜面は断面観察によっても大きな屈曲をもたない。

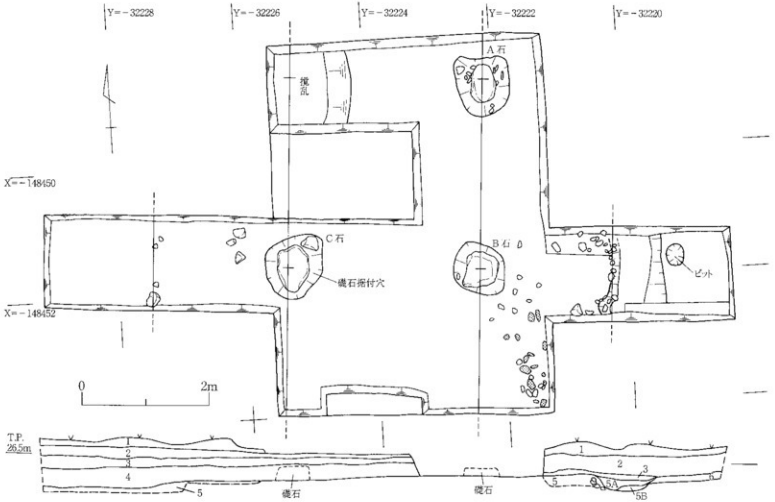
東面回廊北端部の状況（第15次調査Ｅ地区　第17図）

東面回廊の北端部の状況及び金堂との取り付きを検出するため、Ｅ地区を設定した。

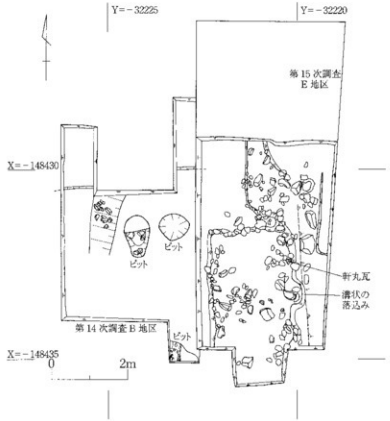
Ｅ地区を含む旧畑地の標高は26.3m前後であり、回廊礎石が遺存していたＣ地区よりも0.4m低い。Ｅ地区の南端で30cm大の角礫がみつかっている。これは第２次調査で最北端に位置するとされたものであるが平坦面をもたないこと、あまりにも小振りであることから、礎石とみなしがたい。このため礎石列の南北延長は49.8mとし、第２次調査の57.7mを修正することにしたい。

まず、第２次調査でふれた調査地東端を斜行する溝を再確認した。溝の検出面は第１層直下、第２層上面であり、埋土も5G4/1暗緑灰色中礫混粘土で、近年の耕作に伴う事は明白である。溝は回廊基壇の方向に沿っていることがわかった。溝が回廊基壇の痕跡なのか、基壇を破壊して掘られたものかは判然としない。次に、第２次調査で検出した小石列を再確認するため、基壇上面を清掃した。第２次調査では、Ｅ地区南端において礎石と考えた石から約1.7m離れて、東西に小石列を検出したとされた。しかし東西に及ぶ石群は認められたものの、石が一直線に連なったり、平坦面が揃うなどの特色はみられず、東面回廊が屈曲して北面回廊に至る状態は看取できない。ただし、溝の肩部に沿った箇所とＥ地区の南部で被熱のために上面が堅く締まっている状況がみられた。回廊基壇上面が火災をうけた様子を示す可能性があるが、現在の耕作土直下であり断定はできない。溝の肩部付近の被熱面からＫＷＭ１の素弁八葉蓮華文が出土した。

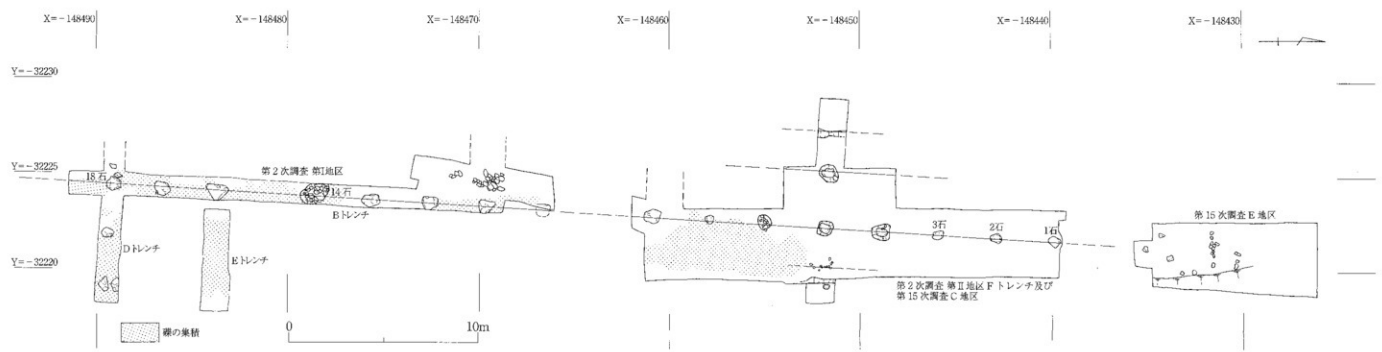
東西に延びる石列はむしろＥ地区の中央で顕著であったが、第14次調査Ｂ地区の状況とは整合しない。北面回廊とその金堂への取り付き状況の確認は、今後の課題である。



第16図　東面回廊北部実測図（第15次調査Ｃ地区）



第17図　東面回廊北部状況図（第14・15次調査）

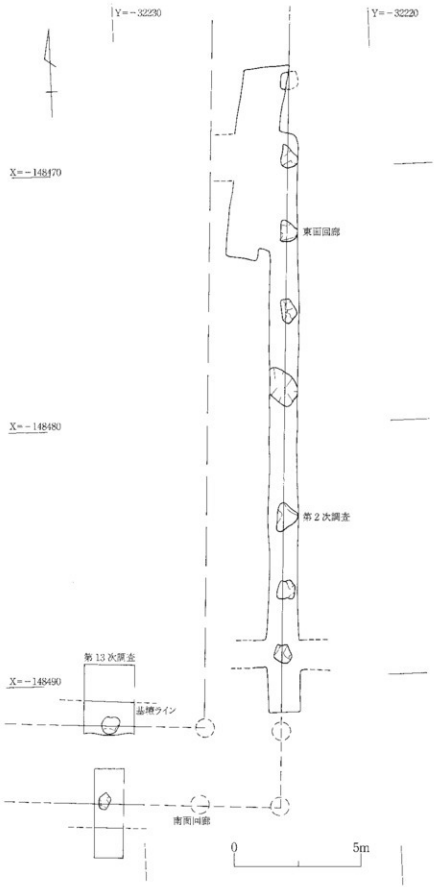


第18図　東面回廊平面図（▨：礫の集積）

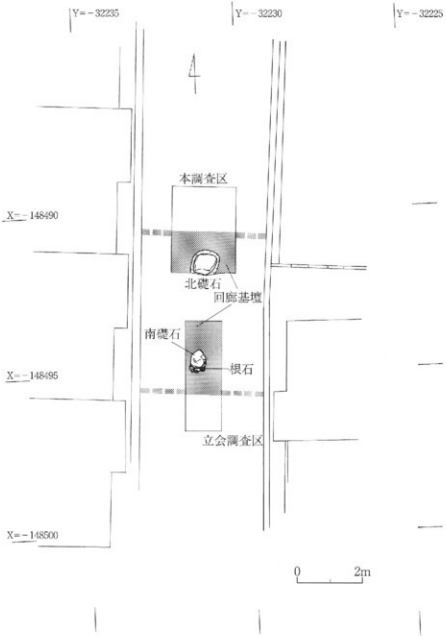
4）南面回廊(第13次・16次調査　第19～21図)

塔跡に接する東西道路から南方は、昭和40年代から人家が建て込んでおり、第1・2次調査を除いて調査は行われなかった。平成17・18年度の2回にわたり、南北道路2本のそれぞれに排水管工事が実施されることになった。推定伽藍配置によれば、管工事は南面回廊を跨ぐ形になるので、緊急調査を実施した。

第13次調査では、当初南面回廊の礎石が原位置を保って遺存しているとは予想できず、礎石や基壇上部の土層堆積状況に投影された何らかの痕跡を検出すべく調査を行った。第11次調査の成果で得た伽藍配置で、南面回廊と推定される箇所を本調査区とした。礎石は北と南で2個検出した。礎石の心々距離で、3.0m(10尺)を測る。これは東面回廊の北部と同規模である。仮に北礎石、南礎石としておく。北礎石は東西70cm、南北68cmを測る。上面は扁平、中央部でやや凹むが、造り出しなどの加工は認められない。北礎石の据付穴は不定円形を呈し、一辺86cm、検出面からの深さ29cmを測る。据付穴の埋土は、5YR5/6明赤褐色粘土質シルトを主体に5Y4/2灰オリーブ色細礫～中礫が混



第19図　東面回廊南部・南面回廊礎石位置図

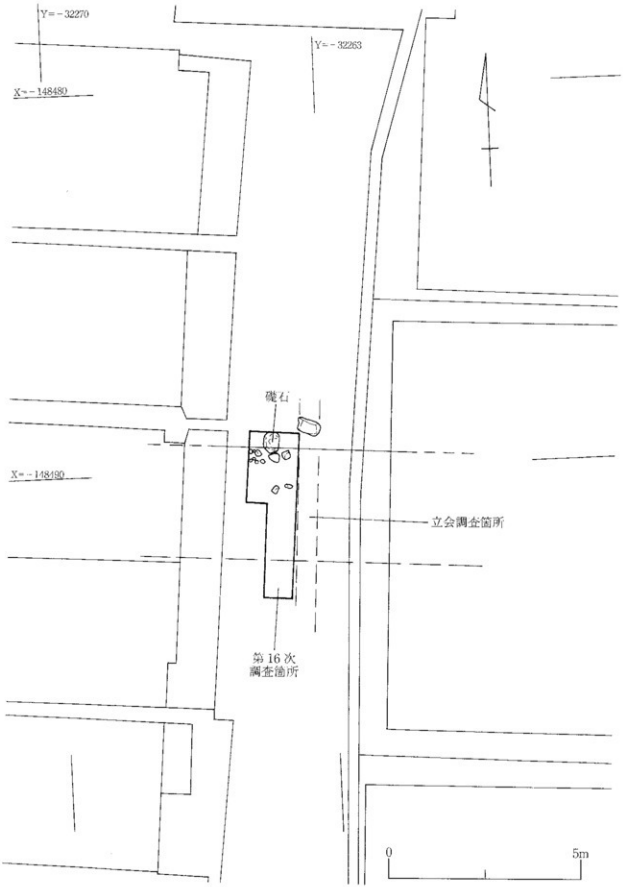


第20図　南面回廊東部礎石位置図

じる層であった。北礎石を取り上げ後、据付の根石を検出した。根石は拳大で底面にはなく、据付穴の側面を囲繞するように張り付けられていた。据付穴の遺構面には、一辺30～50cmの角礫が露出していた。南礎石は、立会調査地区で検出した。工事箇所を横断する埋設管の関係で、礎石のみの調査にとどまった。南礎石は東西52cm、南北59cmを測る自然石である。北礎石より小振りである。また平坦面も小さい。南礎石の南側で拳大の根石を３個検出した。

第16次調査では調査前に撤去予定のマンホールが約4.5mのピッチで道路上に設置されていたため、マンホール間にトレンチを設定した。南側は排水管埋設の深度まで遺物を疎らに含む土層のみの検出にとどまっていたが、トレンチの北端で古墳時代後期の遺物を多く含む層を検出し、その下部で礎石状の石を発見した。石は東西42cm、南北55cmを測る。石の東半分が露出したのみであったため、さらにトレンチを西に拡張して石の全形の把握に努めた。全形を検出したところ、石の平坦面は傾斜しており、レベルを保っていなかった。調査終了後、本管の立会調査を行なったところ、撤去したマンホールの直下に別の礎石状の石が発見された。石は工事掘削幅の外に出るため、規模は不明である。石の平坦面はレベルを保っていた。この結果と伽藍中軸線の方向から南面回廊を復原したところ、当初検出した礎石状石の心に３ｍピッチの礎石位置が載ることがわかり、前者が南面回廊礎石の蓋然性が高くなった。

ここで、東面回廊と南面回廊の各礎石上面レベルを比較してみたい。第15次調査Ｃ地区で検出した東面回廊Ａ～Ｃ石の平均は26.4mであった。一方、南面回廊東側（第13次調査）の北礎石は26.7mで0.3m高い。ところが南面回廊西側（第16次調査）の礎石状石は24.3mで東側と比べて2.4mも低い。礎石



第21図　南面回廊西部礎石位置図

状石を覆う古墳時代の遺物を含む層の堆積時期を新しくみて、東側とほぼ変わらないレベルに整地、造成した南面回廊の西側を傾斜面に沿ってカットした可能性も考えられるが、金堂基壇に見られたように、河内寺廃寺では伽藍造成にあたって、大規模な整地を行っていないと推定される。伽藍中軸線の西側の遺構の様相追求が今後の課題となろう。

5）その他

礎石の遺存状態が良好な東面回廊と比べて、西面回廊は現在まで未検出である。既に第1次調査で西面回廊推定位置にトレンチを設けたが、攪乱が激しく何の痕跡もなかったと報告されている。第15次調査で再度西面回廊推定箇所にトレンチを設定した(D地区)が、トレンチの現地表面が近接するB地区より0.7mも低く、また東からの崖面に近現代の廃棄物が堆積した状態であった。当該地には溜池があったとされており、その築造時に西面回廊は湮滅したようである。

講堂は、金堂の背後、北側に位置を推定している。ただし前述したように、金堂から北へは大きく下降する。金堂基壇北辺の現地表面が25.8mであるのに対し、北側の集合住宅は25.0mと0.8mも低い。これは推定講堂の北に埋没谷が走っていたことを裏付けるものである。またこの谷地形が伽藍の北端を区画するものと考えられる。第1次調査で、推定講堂箇所にトレンチを設け、南に大きく張り出す基壇(北基壇)を検出したとされているが詳細は不明である。

中門は南面回廊の中央部に位置を推定している。平成17年度に推定箇所について試掘確認調査を実施した。工事掘削深度までには本来の堆積層は認められなかったが、ボーリングステッキで下層の状態を探ったところ瓦片に到達したため、中門等の遺構が残存している可能性が高い。

V．出土遺物

弥生時代後期～中世の遺物がある。土器の挿図番号の横に記している㊥は採集品、①は第1次発掘調査、②は第2次発掘調査など、○印中の数字は出土調査次数を表わす。

1）寺創建時以前の遺物

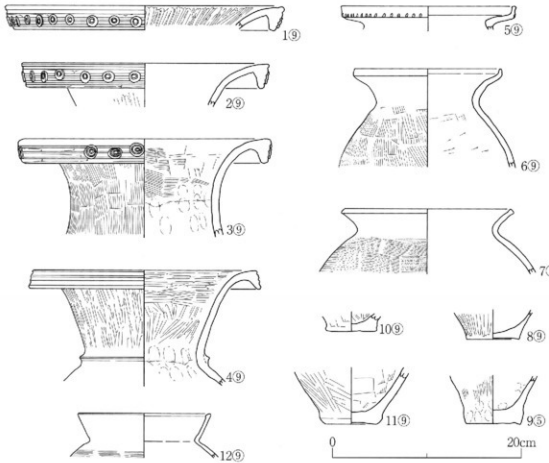
弥生時代後期、布留式期の土器と古墳時代の須恵器・土師器・玉がある。

弥生土器(第22図　1～11)

弥生土器は壺・甕と器種不明の底部がある。1～4は壺である。頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部には擬凹線文を施す。1～3は円形浮文を貼り付けた後、竹管文を加える。4は頸部と体部の境に1条の凸帯を巡らす。内外面はヘラミガキ調整するものが多いがハケメ調整するものもある。5～7は甕である。5は口縁部が外反した後、上方へ長く伸びる。口縁端部はやや面をもつ。口縁部下端にキザミ目を施す。6は体部がやや張る。口縁部が大きく外反した後、上方へ拡張する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整する。7は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。8～11は底部である。平底を呈する。内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。すべて生駒西麓産である。

布留式土器(第22図　12)

12は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が外上方に伸びる。口縁端部は内側へ面をもって肥厚する。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。



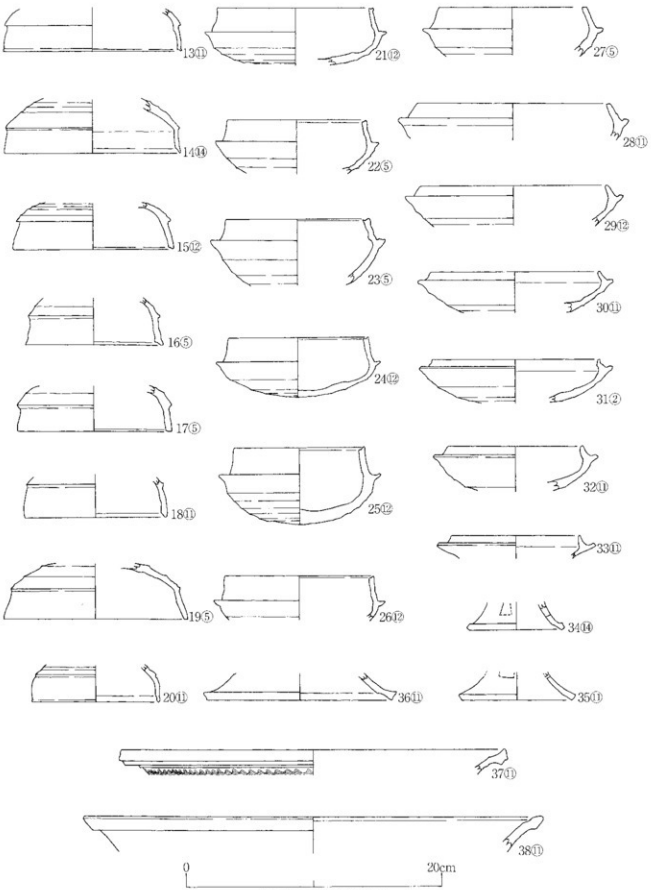
第22図　弥生土器・土師器実測図

須恵器(第23図　13～38)

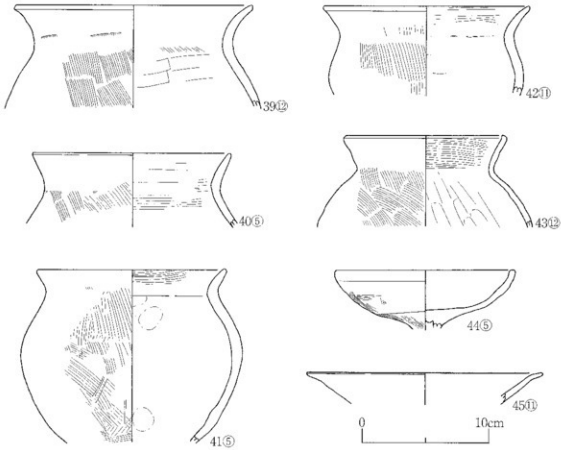
蓋杯・杯・高杯・甕の器種がある。13～20は蓋杯である。13～18は天井部がやや平坦で、口縁部が八字形に伸びる。天井部はやや平坦である。口縁部と天井部の境に稜が付く。口縁端部は面をもち沈線を巡らす。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初め。19・20は形状や調整法が13～18とほぼ同様であるが口縁端部が丸く終わる。6世紀前半。21～33は杯である。21～26は体部が深い。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がりは長く内傾する。端部は面をもち沈線を巡らす。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初め。27～30は形状や調整法が21～26とほぼ同様であるが口縁端部が丸く終わる。6世紀前半。31～33は体部が浅い。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がりは短く外反する。端部は丸く終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。6世紀後半～7世紀初め。34～36は高杯である。裾部はゆるく立ち上がり裾端部は面をもつ。34・35は形状が不明であるが透かし孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。6世紀中葉。37・38は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部が段をもつ。内外面は回転ナデ調整する。37は口縁部に櫛描波状文を施す。5世紀末～6世紀初め。

土師器(第24図　39～45)

甕と高杯の器種がある。39～43は甕である。体部の張りは大きく口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。5世紀後半～6世紀初め。44・45は高杯である。44は杯部が浅い皿状を呈する。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。5世紀中葉～後半。45は杯部が外上方に伸び、口縁部がゆるく外反する。


13①
21②
27⑤
14①
22⑤
28①
15②
23⑤
29②
16⑤
24②
30①
17⑤
31②
18①
25②
32①
19⑤
26②
33①
34①
20①
36①
35①
37①
38①
0
20cm

第23図　須恵器実測図

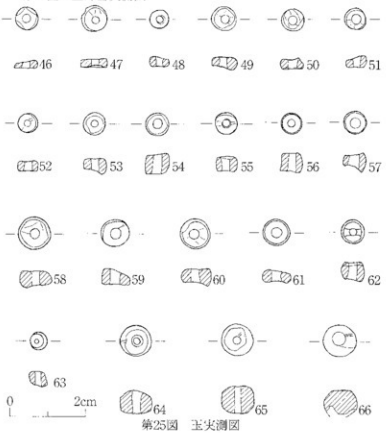


第24図　土師器実測図

口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。５世紀後半～６世紀初め。

玉（第25図　46～66）

第11次調査の塔心礎確認トレンチ第５層（版築土層）から出土した。現場の掘削七を採集し、調査終了後、洗浄によって確認した。46～62は滑石製臼玉である。器高は２～３㎜大と５㎜大の２種に大別できる。前者は色調が緑黒色、後者は淡緑灰色を呈する。63はガラス玉である。碧緑色を呈する。64・65は玉であるが材は不明である。黒褐色を呈する。66は金属製玉状製品である。



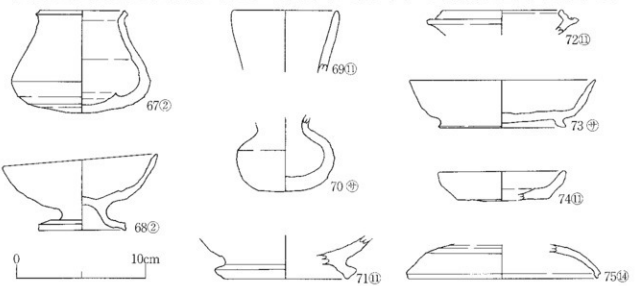
第25図　玉実測図

2）寺創建～廃絶時の遺物

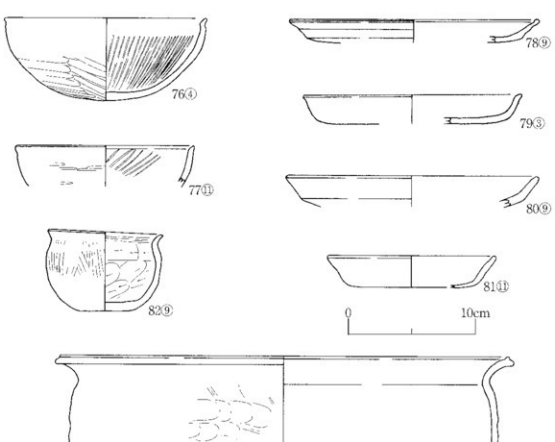
須恵器・土師器・瓦器・円面硯・獣脚・瓦がある。

須恵器（第26・29図　67～75・143）

壺・高杯・杯・蓋杯がある。67・69～71は壺である。67は底部が丸底を呈する。体部は下半で張り、口縁部が短く外反する。口縁端部は面をもつ。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。



第26図　須恵器実測図



第27図　土師器実測図

7世紀後半。69は長頸壺である。口縁部が外上方に伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。70は底部が丸底を呈し、体部が丸い。詳細な時期は不明である。体部下半を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。71は壺の底部である。高台が付く。内外面は回転ナデ調整する。詳細な時期は不明である。68は高杯である。杯部は浅い皿状を呈し、端部が尖り気味に終わる。脚部は短い。裾部がゆるく伸び、さらに急に上方へ立ち上がる。裾端部は面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。6世紀後半。72～74は杯である。72は受部が水平方向へ伸びる。立ち上がりは短く外反する。端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。7世紀後半。73は高台の付く杯である。体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。8世紀。74は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。7世紀後半。75は蓋杯である。天井がやや丸味をもつ。口縁端部は摘み上げ気味に終わる。天井部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。8世紀。143は捏鉢である。体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部はやや面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。12世紀末～13世紀初め。

土師器（第27～29図　76～114・119～142）

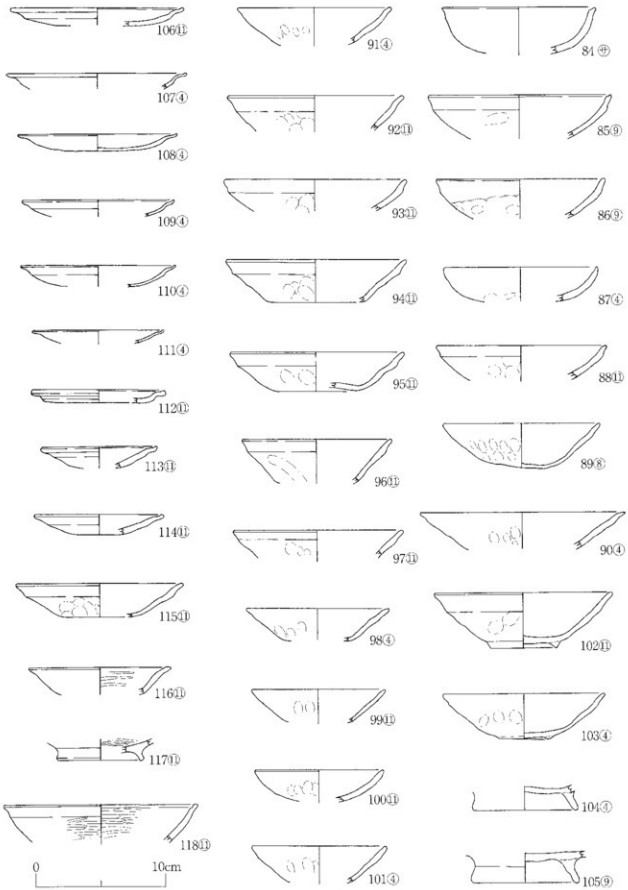
鉢・皿・甕・椀がある。76・77は鉢である。底部は丸底を呈する。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。外面はヘラミガキ調整する。内面に放射状の暗文を施す。8世紀中葉。78～81・106～114・119～142は皿である。78は平底を呈する。口縁部がゆるく外反し、口縁端部が内側へ肥厚する。外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。8世紀中。79～81は口縁部が外上方に伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面はナデ調整する。8世紀後半。106～114は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。内外面はナデ調整する。106～111は10世紀～11世紀初め。112～114は11世紀前半。119～142は口縁部がやや外反するものと内湾気味に立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。12～13世紀。82・83は甕である。82は平底に近い丸底である。体部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。8世紀。体部外面は上半をハケメ調整、下半をナデ調整する。内面はヘラケズリ調整する。83は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつ。体部外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。9世紀。84～105は椀である。84～87は底部が丸底に近い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸く終わる。内外面はナデ調整する。9世紀中～後半。88～103は体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。102・103は低い高台が付く。9世紀後半～10世紀。104・105は底部であり、高い高台が付く。詳細な時期は不明である。

黒色土器（第28図　115～118）

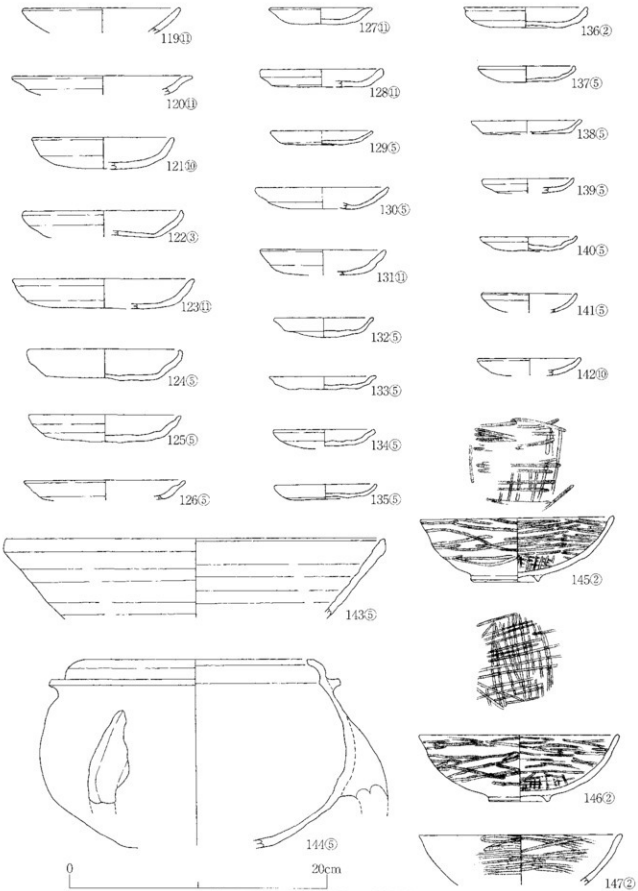
115～118は内黒の椀である。115・116は浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。115は内外面をナデ調整する。9世紀。116は外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。9世紀。117は底部である。高い高台が付く。内面はヘラミガキ調整する。10世紀。118は体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部に沈線を巡らす。内外面はヘラミガキ調整する。10世紀。

瓦器（第29・30図　144～172）

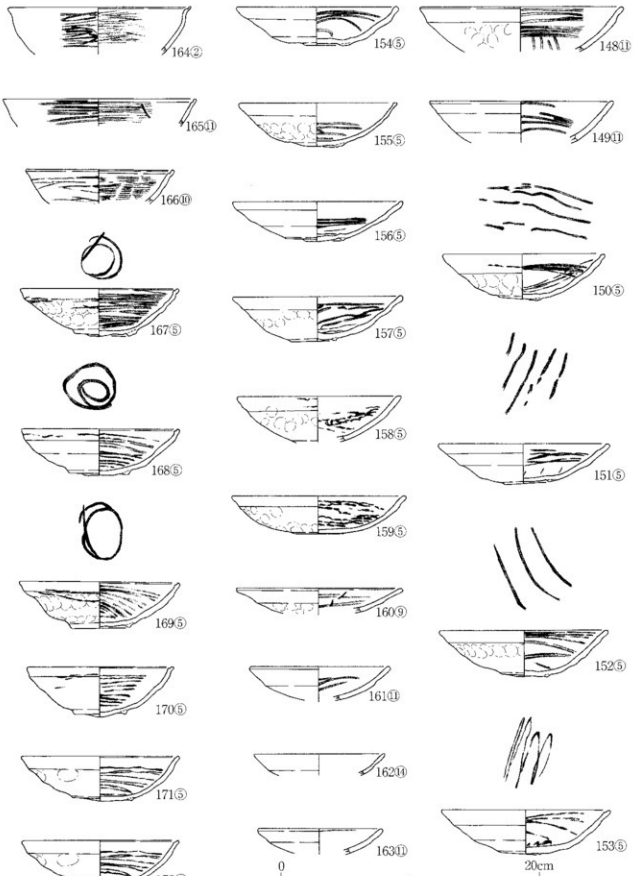
羽釜と椀がある。144は羽釜である。体部は球形を呈する。口縁部は強く内湾し、口縁端部が面をもつ。鍔は短く水平方向に伸びる。端部は面をもつ。体部外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。体部の中位に3本の脚が付く。13世紀。145～172は椀である。145～163は所謂、和泉型の椀である。口縁端部が丸く終わる。145～147は体部が深く、高台が高い。内外面は密なヘラミガキ調整する。見込み部に格子の暗文を施す。12世紀初め。148～153は体部が浅く、高台は低い。体部外面は指オサエ



第28図　土師器・黒色土器実測図

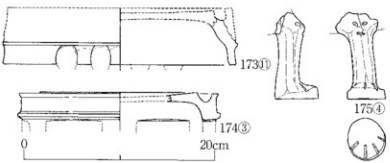


第29図　Ⅰ:師器・須恵器・瓦器実測図


164②
154⑤
148①
165①
155⑤
149①
166⑩
156⑤
150⑤
167⑤
157⑤
158⑤
168⑤
151⑤
159⑤
169⑤
160⑨
152⑤
170⑤
161①
171⑤
162⑭
153⑤
172⑤
163①
0
20cm

第30図　瓦器実測図

調整、内面は粗なヘラミガキ調整する。見込み部に平行線やジグザグの暗文を施す。12世紀末～13世紀初め。154～159は形状や調整法が148～153と同じであるが見込み部の暗文が消失する。13世紀中葉～後半。160～163は体部が浅い皿状を呈し、高台が消失する。内面のヘラミガキ調整も粗であり、消失するものもある。13世紀末～14世紀前半。164～172は所謂、大和型の椀である。口縁端部に沈線を巡らす。164～166は体部内外面を密なヘラミガキ調整する。12世紀前半。167～170は体部が浅く、高台が低い。体部外面は指オサエの後、粗なヘラミガキ調整する。内面はやや密なヘラミガキ調整する。見込み部は連結輪状の暗文を施す。170は不明である。13世紀中葉。171・172は形状や調整法が167～169と同じであるが外面のヘラミガキ調整と見込み部の暗文が消失する。13世紀末～14世紀初め。



第31図　円面硯・獣脚実測図

円面硯（第31図　173・174）

173・174は須恵器の円面硯である。173は硯部と脚部を欠損する。脚部の剥離痕の間隔から、踏脚と考えられる。2脚が確認できる。内外面とも自然釉が付着する。174は脚部を欠損するが透かし孔の痕跡が残る。幅広の長方形を呈していたと考えられる。脚部との境に凸帯が巡る。6世紀後半～8世紀。

獣脚（第31図　175）

175は須恵器の獣脚である。本来の器形は不明。残存長は9.1cm。足は楕円形を呈する。ヘラ描きによる4本の線刻を施し、指を表現する。また、上部にはヘラ描きによる目・口と稜線によって鼻を描き、顔を表現する。全体に丁寧なヘラケズリ調整。6世紀後半～8世紀。

瓦

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾・鬼瓦・丸瓦・平瓦などがある。出土量は圧倒的に第11次調査のものが多い。今後、河内寺廃寺跡より出土する軒丸瓦はＫＷＭ１・２・３、軒平瓦はＫＷＨ１・２・３とし、新種が出土した時は番号を追加する（表4）。胎土はほとんどが生駒西麓産であり、稀に非河内産のものがある。産地を文末に記していないものは生駒西麓産である。

軒丸瓦

軒丸瓦は7種類あり、ＫＷＭ１～７に分類した。

ＫＷＭ１（第32図　176）

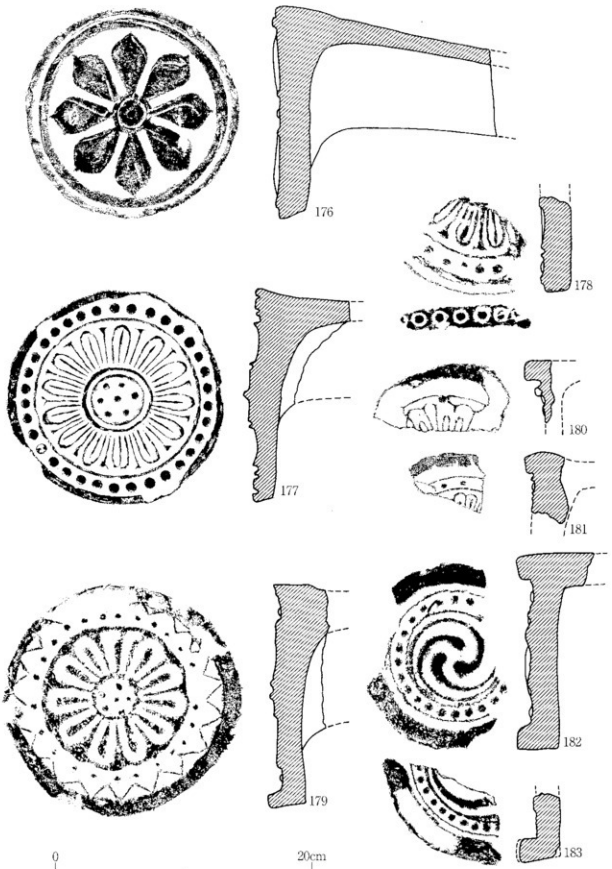
素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は扁平で１＋６の蓮子が巡る。中房径は3.0cmを測る。内区には八葉の素弁をもつ。花弁は扁平で先端は尖る。弁間に珠点は伴わない。周縁は扁平である。飛鳥時代後期。

ＫＷＭ２（第32図　177・178）

単弁十三葉蓮華文軒丸瓦である。中房は突出し、１＋６の蓮子が巡る。弁間には間弁がある。花弁はやや凹み、先端は丸く、中軸は凸線をもつ。外区外縁は素文、内縁は珠文が巡る。周縁は低縁である。178は瓦当下部傾縁に○文が押捺される。白鳳～奈良時代。

ＫＷＭ３（第32図　179）

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。四天王寺旧境内出土の軒丸瓦に類例がある。中房は突出し、１＋



第32図　軒丸瓦実測図

表3　調査次数別軒丸瓦出土量　※採は採集品　●は点数小明

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	採	計
KWM1		●	4	2	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	2	0	2	15
KWM2		●	2	6	2	0	0	0	0	3	0	20	0	0	0	2	0	7	42
KWM3		●	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4	8
KWM4			0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
KWM5			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KWM6			1	1	0	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	23
KWM7			0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	4

5の蓮子が巡る。中房径は3.5cmを測る。内区には十二葉の単弁をもつ。花弁が完結せず、別の花弁と重なる箇所が見られる。花弁は膨らみ、先端は丸い。内部に子葉をもつ。外区外縁は線鋸歯文、内縁は珠文が巡る。周縁は中高縁である。平安時代中期。

KWM4（第32図　180）

複弁蓮華文軒丸瓦である。内区の複弁上に珠点をもつ。非河内産である。平安時代後期。

KWM5（第32図　181）

複弁蓮華文軒丸瓦である。外区外縁が素文で内縁にやや粗略な珠文が巡る。文様構成は、平城京軒丸瓦6227E型式と同様と考えられる。内区の花弁が小さいことから中房は大型と推定される。周縁は高縁である。平安時代。

KWM6（第32図　182）

巴文軒丸瓦である。巴文は左廻りである。巴頭部は丸く、幅広い。珠文帯と圏線を施す。外縁幅は広く、外縁高は高い。鎌倉時代。

KWM7（第32図　183）

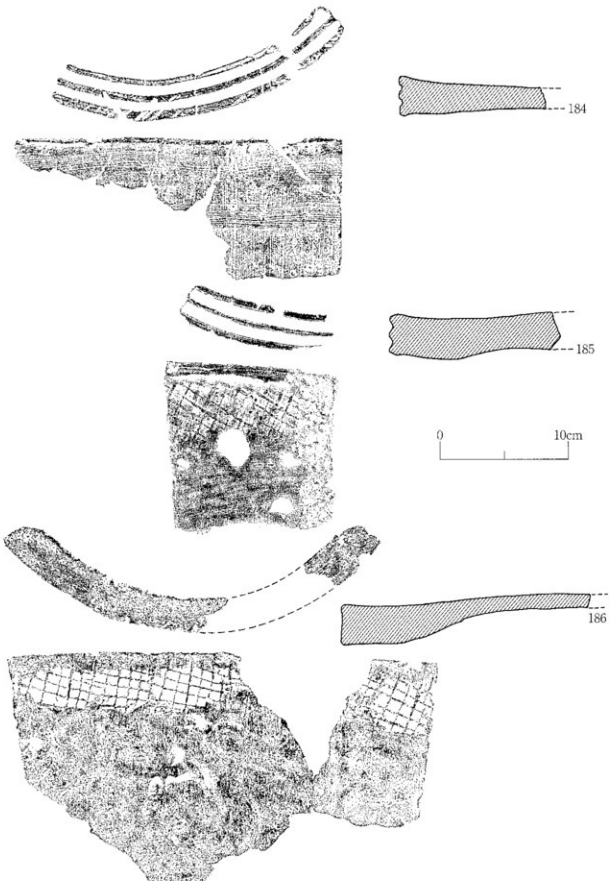
巴文軒丸瓦である。巴文は右廻りである。文様断面は台形を呈する。珠文は密である。外縁幅は広く、外縁高は長く高い。鎌倉時代。

軒平瓦

軒平瓦は15種類あり、KWH1～15に分類した。

KWH1（第33図　184・185）

曲線顎の三重弧文軒平瓦である。凸面は格子のタタキを施すものが多いが、稀にハケメ調整するものもある。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは3.5cmを測る。飛鳥時代後期。



第33図　軒平瓦実測図

KWH２（第34図　187）

変形重弧文軒平瓦である。顎は曲線顎。顎部から凸面にかけて文様を施す。六重弧文を配し上部に押捺の×文、中部に押捺の○文、下部は指を斜めに押圧する。顎部先端から凸面にかけて沈線を施して文様帯を形成し、順に指押圧、押捺の×文、押捺の○文、押捺の×文を巡らす。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは5.1cmを測る。白鳳時代。

KWH３（第34図　188・189）

偏行唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎。内区は左偏行の唐草文を施す。外区、脇区には太い線鋸歯文が巡る。凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは5.6cm。189は上外区を工具でナデ消すが鋸歯文の残滓が破線状に見える。笵傷が進行したためと考えられる。白鳳～奈良時代。

KWH４（第34図　190）

山形文軒平瓦である。顎は曲線顎。施文は太い。極めて瓦当面が厚い。外区、脇区とも素文である。凸面は縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは7.0cmを測る。平安時代中期。

KWH５（第34図　191・192）

山形文軒平瓦である。文様は陰刻し、施文は太い。顎は曲線顎。191・192は同一個体と見られる。いずれも瓦当面は厚い。191は瓦当面右縁部で緩やかなV字状の山形文が交接する。山形文の内部に陰刻の珠点をもつ。192は雲形状文様に陽刻の珠点３個を内包する。凸面は縄目のタタキの後、ナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは6.6cmを測る。平安時代後期。

KWH６（第35図　193）

唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎。瓦当面は厚い。外区、脇区との境に二重界線が施される。脇区へは推定の中心飾りから唐草文は３回反転程度と考えられる。施文は太い。平瓦部凸面は縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは5.8cmを測る。奈良時代。

KWH７（第35図　194）

唐草文軒平瓦である。平瓦部の広端面の先端を折り曲げて瓦当とするため、顎は三角形に近い曲線顎である。施文は細い。外区、脇区とは界線で区画する。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さ5.3cmを測る。非河内産である。平安時代後期。

KWH８（第35図　195）

均整忍冬唐草文軒平瓦である。法隆寺式軒平瓦に相似するが、文様の崩れが認められる。顎は曲線顎である。瓦当面は狭い。宝珠形か紡錘形の中心飾りから忍冬唐草文が伸びる。主茎との結節の結びつけは珠点で代用しており、簡便化が窺われる。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は不明である。瓦当面の厚さは4.7cmを測る。奈良時代。

KWH９（第35図　196）

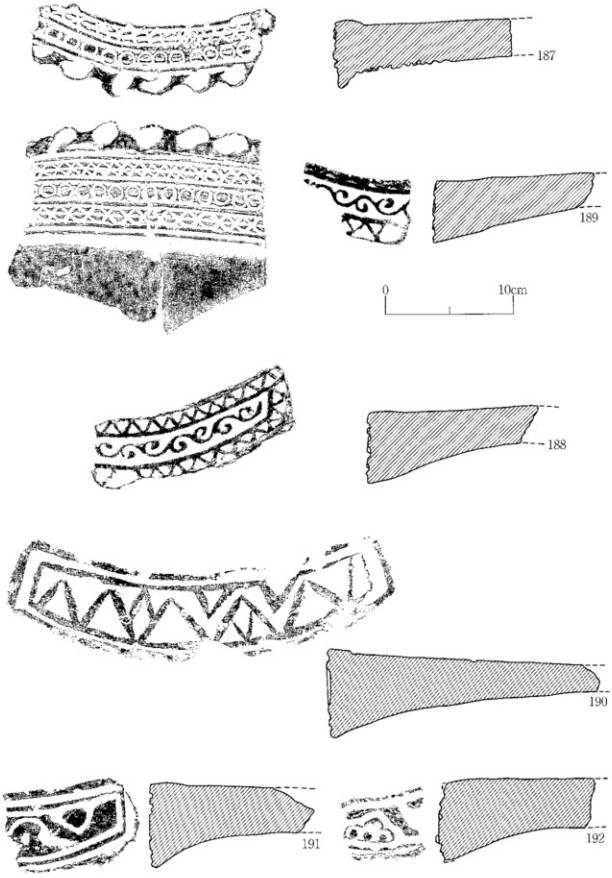
均整唐草文軒平瓦である。八尾市向山瓦窯製軒平瓦と同笵である。客坊山遺跡群第２次調査出土軒平瓦に類品がある。顎は段顎に近い曲線顎である。唐草文は２回反転が確認できる。施文は細い。外区、脇区に珠文をもつ。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは4.2cmを測る。平安時代後期。

KWH10（第35図　197）

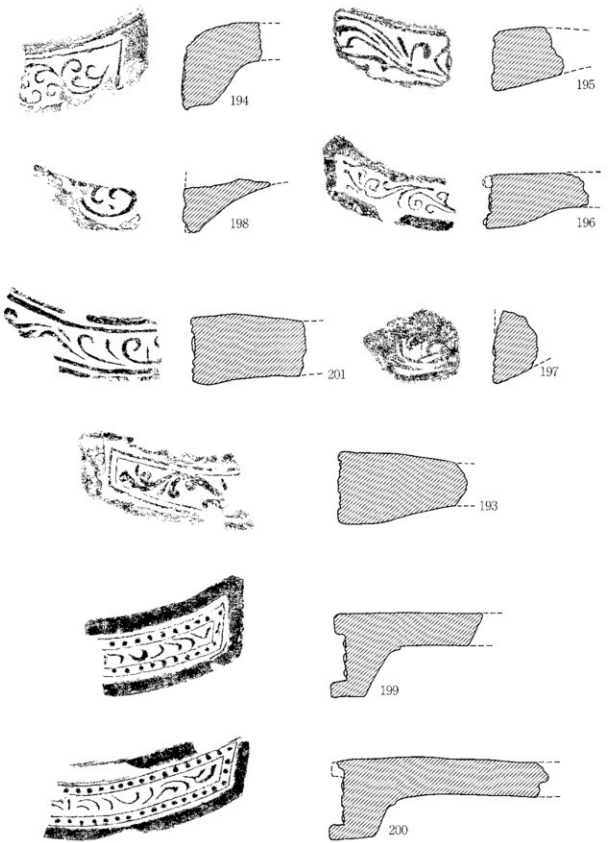
瓦当面が大きく剥離しているが、唐草文軒平瓦と考えられる。顎は曲線顎と見られる。詳細不明であるが、内区に２本の唐草文が認められる。平安時代後期。

KWH11（第35図　198）

瓦当面上半部を欠損するが、唐草文軒平瓦と考えられる。顎は曲線顎。２本の唐草文が認められる。



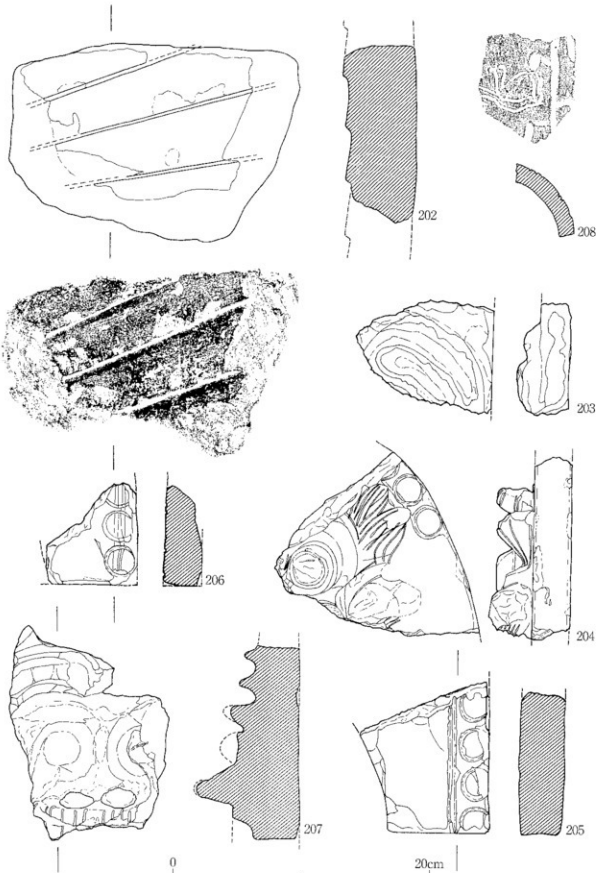
第34図　軒平瓦実測図



第35図　軒平瓦実測図

表4　調査次数別軒平瓦出土量　※採は採集品　●は点数不明

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	採	計
KWH1		●	3	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	3	11
KWH2		●	0	2	0	1	0	0	0	0	0	16	0	0	0	2	0	6	27
KWH3		●	1	0	0	0	0	0	0	2	0	19	0	0	0	1	0	1	24
KWH4			0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	6
KWH5			0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
KWH6			1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	4
KWH7			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KWH8			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KWH9			0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
KWH10			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KWH11			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KWH12		●	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	4	10
KWH13			1	0	0	0	0	0	0	1	0	7	0	0	0	0	0	0	9
KWH14			2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4
KWH15			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1



第36図　鵄尾・鬼瓦・ヘラ描き絵画丸実測図

施文はやや太い。平瓦部凸面はナデ調整する。非河内産である。平安時代後期。

KWH12（第35図　200）

均整唐草文軒平瓦である。顎は段顎。外区、脇区は大きく突出する。瓦当面は厚い。興福寺出土例と同笵である。中心飾りは下向き支葉である。唐草文は４回反転である。外区、脇区には密な珠文が巡る。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは6.3cmを測る。鎌倉時代。

KWH13（第35図　199）

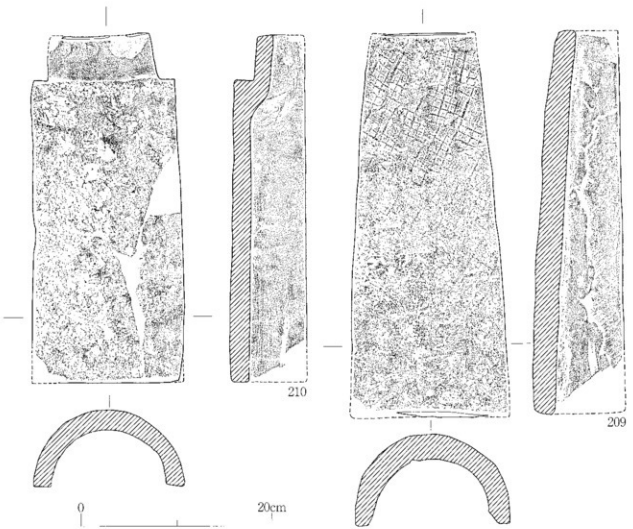
均整唐草文軒平瓦である。顎は段顎。外区、脇区は大きく突出する。瓦当面は厚い。唐草文は３回反転が確認できる。外区、脇区の珠文はやや疎らである。平瓦部凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは6.5cmを測る。鎌倉時代。

KWH14（第33図　186）

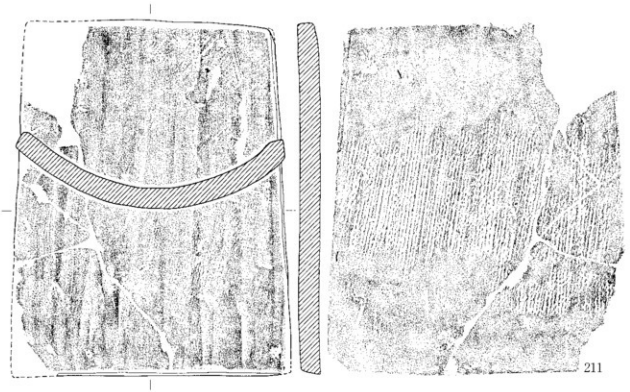
無文軒平瓦である。顎は曲線顎。形状や調整法はＫＷＨ１と同じであるが瓦当に文様を施さない。凸面は格子のタタキを施す。凹面は布目が残る。瓦当面の厚さは3.2cmを測る。飛鳥時代後期。

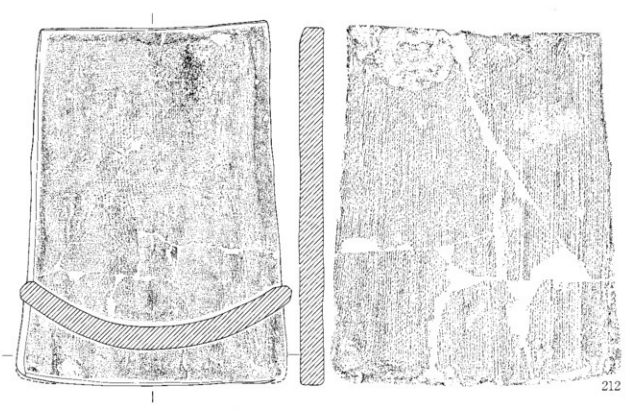
KWH15（第35図　201）

均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎。瓦当面は厚い。外区との境に界線が施される。中心飾りから唐草文は３回反転と考えられる。施文はやや太い。平瓦部の凸凹面はナデ調整する。瓦当面の厚さ



第37図　丸瓦実測図





第38図　半瓦実測図

は5.0cmを測る。奈良時代後半～平安時代。

鴟尾(第36図　202)

右側面胴部の破片である。縦は24.0cm、横は15.0cm、最大厚5.0cmを測る。外面は幅3.5～4.5cmで正段を削り出す。4段が残る。内面は無文である。白鳳時代。

鬼瓦(第36図　203～207)

203～207は鬼瓦である。203は肉厚で盛りあがった眉を表現したものと考えられる。204は周縁に竹管文を押捺する。竹管文に沿って1条のヘラ描きの沈線を施す。突出した眼球、隆起した眉と頬を表現する。205・206は鬼瓦の地板基底部であり、周縁に竹管文を押捺する。205は地板の弧状部が残る。また、周縁の竹管と鬼面部との境にはヘラ描きの沈線を施す。207は非常に立体的な顔である。眉・鼻・眼球・口を表現する。鎌倉時代。

ヘラ描き絵画瓦(第36図　208)

丸瓦の凸面にヘラ描きの絵を描く。ヘラのあたりは浅く、幅が広い。何を表現しているのかは不明である。時期は不明である。

丸瓦(第37図　209・210)

209・210は丸瓦である。209は無段式の丸瓦である。凸面は格子のタタキを施す。内面は布目が残る。端面はケズリによって面をもつ。狭端面より約1/3は保存状態が良く、残り約2/3は風化が著しい。この痕跡は瓦を葺く際に約1/3を重ねあわせていたと考えられる。210は有段式の丸瓦である。凸面の玉縁部はナデ調整、他は風化が著しく調整法は不明である。凹面は布目が残る。端面はケズリによって面をもつ。209は飛鳥時代、210は平安時代。

平瓦(第38図　211・212)

211・212は平瓦である。凸面は縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。端面及び側面はケズリによって面をもつ。212は広端面より約1/3は保存状態が良く、残り約2/3は風化が著しい。これも209の丸瓦と同様な痕跡と考えられる。白鳳～奈良時代。

3)　第15次調査出土遺物

各地区の層ごとに説明を記す。

A地区第2層出土(第39図　213)

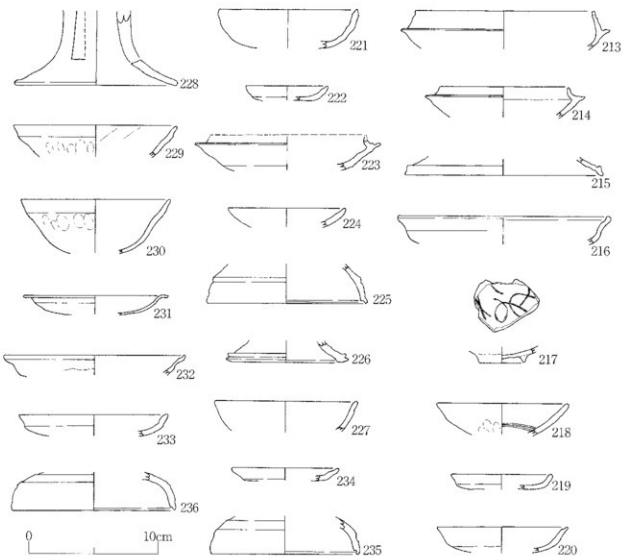
213は須恵器の杯である。体部は深い。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がりはやや長く内傾する。端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。6世紀前半。

A地区第4層出土(第39図　214)

214は須恵器の杯である。体部は浅い。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がりは短く外反する。端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。6世紀後半。

B地区第2層出土(第39図　215～220)

須恵器・土師器・瓦器がある。215は須恵器の高杯である。裾部はゆるく立ち上がる。裾端部は面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。6世紀後半。216・219・220は土師器の皿である。216は口縁部が外反し、口縁端部が内側へ肥厚する。風化のため調整法は不明である。8世紀中葉～後半。219・220は口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。12～13世紀。217・218は瓦器の椀である。217は断面形が三角形の高台を貼り付ける。見込みに連結輪状の暗文を施す。詳細な時期は不明である。218は体部が皿状を呈する。口縁端部は丸く終わる。外面は指オサエ調整する。内面は螺旋状の暗文を施す。13世紀末～14世紀初め。



第39図　第15次調査出土須恵器・土師器・瓦器実測図

C地区第２層出土(第39図　221・222)

須恵器と土師器がある。221は須恵器の杯である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。７世紀後半。222は土師器の皿である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。12世紀。

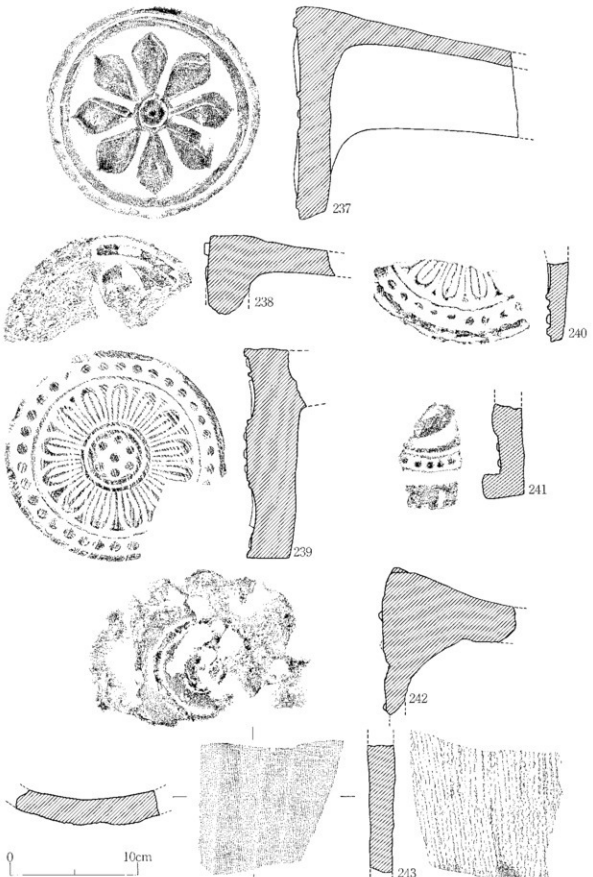
C地区第３層出土(第39図　223・224)

須恵器と土師器がある。223は須恵器の杯である。体部は浅い。受部は水平方向へ伸びる。立ち上がりは短く外反する。内外面は回転ナデ調整する。６世紀後半。224は土師器の皿である。体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。13世紀。

D地区第１層出土(第39図　225・226)

225は須恵器の蓋杯、226は高杯である。225は天井部がやや丸く、口縁部がハ字形に伸びる。口縁部と天井部の境に稜が付く。口縁端部に沈線を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。５世紀末～６世紀初め。226は裾部がゆるく立ち上がる。裾端部に沈線を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。６世紀後半。

D地区第２・３層出土(第39図　227)



第40図　第15次調査出土軒丸瓦・平瓦実測図

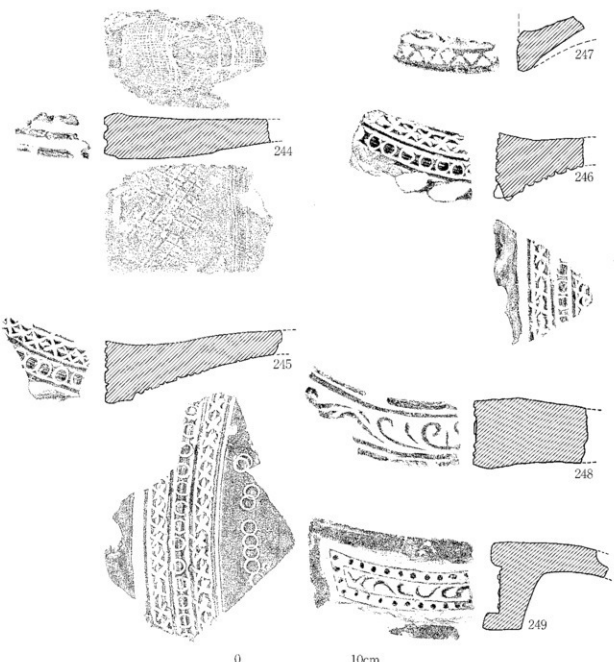
227は土師器の椀である。体部が外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。8世紀後半。

E地区第1層出土(第39図　228)

須恵器の高杯である。脚部はゆるく立ち上がった後、上方へ伸びる。裾端部は丸く終わる。形状は不明であるが透かし孔を穿つ。内外面は回転ナデ調整する。6世紀末～7世紀初め。

E地区第2層出土(第39図　229)

229は土師器の椀である。体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。9世紀後半～10世紀。



第41図　第15次調査出土軒平瓦実測図

E地区第１Ｂ層出土(第39図　230～233)

230は土師器の椀、231～233は皿である。230は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。外面は指オサエ調整、内面はナデ調整する。９世紀後半～10世紀。231・232は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は内傾へ肥厚する。内外面はナデ調整する。10世紀～11世紀初め。233は口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。12世紀。

F地区第２層出土(第39図　234)

234は土師器の皿である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。12世紀。

F地区第３層出土(第39図　235)

235は須恵器の蓋杯である。天井部がやや丸く、口縁部が内湾する。天井部と口縁部の境にゆるい稜が付く。口縁端部に沈線を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。６世紀初め。

G地区第３層出土(第39図　236)

236は須恵器の蓋杯である。天井部がやや丸く、口縁部が内湾する。天井部と口縁部の境にゆるい稜が付く。口縁端部に沈線を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。６世紀初め。

瓦

軒丸瓦・軒平瓦・平瓦がある。

軒丸瓦(第40図　237～242)

237～242は軒丸瓦である。３種類が出土した。軒丸瓦の詳細な説明は前項の２）寺創建～廃絶時の遺物（軒丸瓦）で記したので省略する。237（176と同一）・238はＫＷＭ１、239・240はＫＷＭ２、241はＫＷＭ７、242は種類が不明である。

軒平瓦(第41図　244～249)

244～249は軒平瓦である。５種類が出土した。軒平瓦も詳細な説明は前項の２）寺創建～廃絶時の遺物（軒平瓦）で記したので省略する。244はＫＷＨ１、245・246はＫＷＨ２、247はＫＷＨ３、248（201と同一）はＫＷＨ15、249はＫＷＨ13である。248は今回の発掘調査で出土した新種の資料である。

平瓦(第40図　243)

243は平瓦である。凸面は縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。凸面には幅約２㎝で帯状の赤色塗料が残る。白鳳～奈良時代。

４）第16次調査出土遺物

弥生土器・須恵器・土師器・瓦がある。

弥生土器(第42図　250・251)

250・251は弥生土器である。250は甕である。口縁部を下方へ拡張する。口縁端部は面をもち、竹管文を施す。251は鉢である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部が面をもつ。共に風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産である。後期。

土師器(第42図　252)

252は甑である。３個に分かれているが復原すると図のようになる。平底に近い丸底である。部分的に透かし孔が残る。体部は外上方へ直線的に伸び、口縁端部に至る。口縁端部は面をもつ。外面はハケメ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。体部の中位に角状の把手を施す。６世紀。

須恵器(第42図　253～257)

杯と蓋杯がある。253～256は杯である。受部は短く外上方へ伸びる。立ち上がりは短く内傾する。端部が丸く終わる。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。257は蓋杯である。天井部はやや丸く、口縁部がやや内湾する。口縁端部は丸く終わる。外面の天井部と口縁部の境に退化した稜が残る。6世紀中葉。

瓦

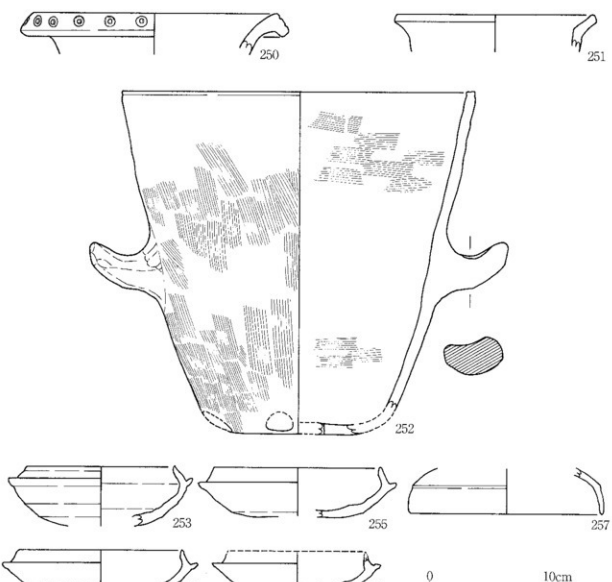
平瓦と丸瓦がある。

平瓦(第43図　258～264)

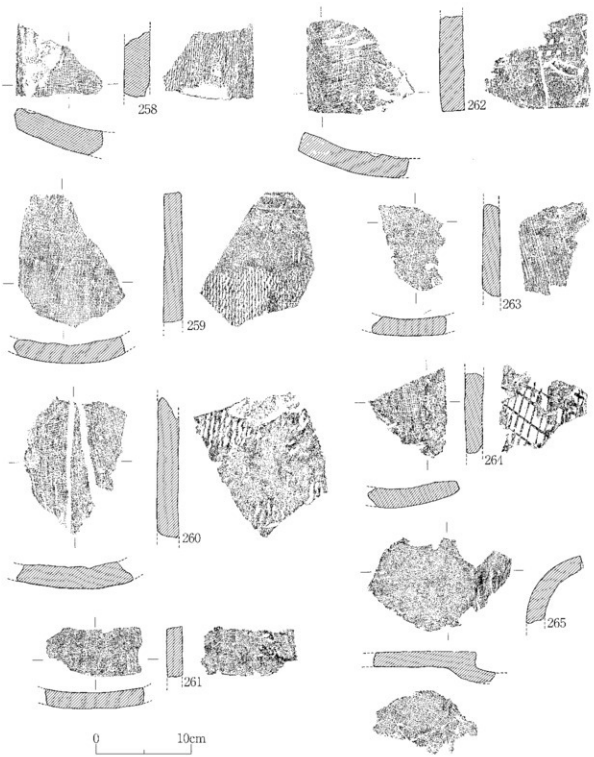
258～264は平瓦である。258～260は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。261は凸面をナデ調整する。凹面は布目が残る。262・264は凸面に格子のタタキを施す。凹面は布目が残る。263は凸面をハケメ調整する。凹面は布目が残る。262～264は飛鳥時代、258～260は白鳳～奈良時代、261は平安時代。

丸瓦(第43図　265)

265は玉縁の丸瓦である。凸面はナデ調整する。凹面は布目が残る。平安～鎌倉時代。



第42図　第16次調査出土弥生土器・土師器・須恵器実測図



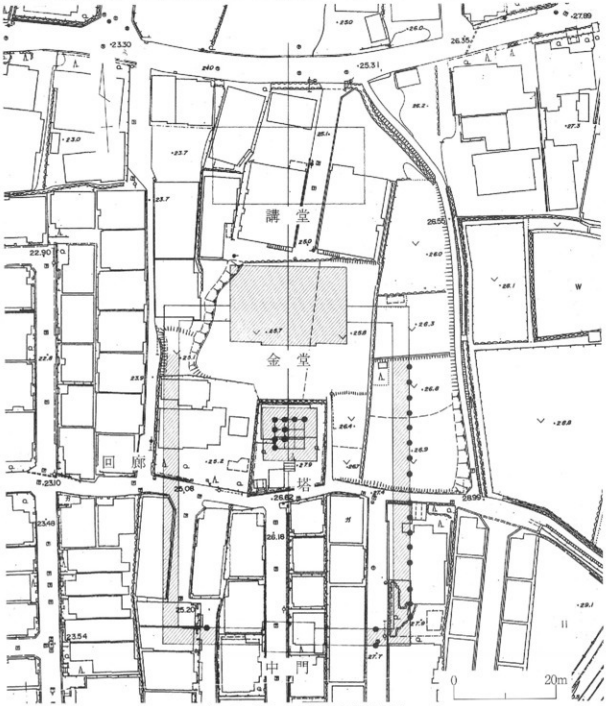
第43図　第16次調査出土平瓦・丸瓦実測図

Ⅵ. 調査成果の総括

16次にわたる河内寺廃寺跡の調査で、伽藍の全体像は次第に明らかになりつつある。ここでは、大阪府下の古代寺院における河内寺廃寺の位置づけと敷衍する諸問題について、考えていきたい。

1）河内寺廃寺跡の伽藍内堂塔と回廊の特徴（第44・45図）

大阪府下の古代寺院は、116カ寺を数える（大脇2007）。これまでの調査で、河内寺廃寺跡の伽藍規模は、南北約105m、東西約50mを測るものと推定される（第44図）。この規模は、南北１町、東西半



第44図　河内寺廃寺伽藍配置復原図

町に相当する。新堂廃寺跡(富田林市)は南北約90m、東西約50mの規模であるので、河内寺廃寺跡は南北にやや長い配置をとることがわかる。伽藍の中軸線は、座標北に対して北へ約3.5°東に振れている。真北は座標北に対して1°12′西へ振れているため、中軸線は真北に対して約5°東に振れることになる。

河内寺廃寺跡は中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置をとる。第1次調査で推定された基壇建物の比定が、第11次調査の結果、蓋然性が高いことが確かめられた。ただし東面回廊南部では回廊外に建物の痕跡があり、その性格を把握することが必要となる。なお、第45図にこれまでの河内寺廃寺跡の発掘調査で判明している金堂以南の伽藍を示した。

大阪府下で四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院は、前記の新堂廃寺跡や四天王寺旧境内(大阪市)などに限られ、大きな特徴である。河内寺廃寺の造営氏族が古相の伽藍造営手法を導入したことを示している。その一方、河内寺廃寺跡の伽藍配置は独自の形態を指向している。それは金堂－中門の間が等間でないことである。塔－中門間の距離約32mは塔－金堂間の距離約12mの2倍強を示す。塔－中門間の距離が大きいのが特徴である。仏教法会などの諸儀式の広場が必要であったか、あるいは別の建物がその間に介在するかについては今後の課題として残る。

次に金堂・塔・回廊の規模について調査成果をまとめておきたい。金堂基壇の規模は、東西23.1m(77尺)、南北15.0m(50尺)で確定した。現状の基壇高は約0.3mである。金堂基壇は川原寺西金堂(東西72尺、南北49尺)(稲垣1975b)とほぼ同規模である。塔創建時の基壇は一辺10.7m(約36尺)を測る。これは川原寺塔(39尺)や美濃弥勒寺塔(38尺)と同規模であり、法隆寺塔(46.5尺)や尼寺廃寺塔(45尺)よりかなり小振りとなる。塔の層数は宝生寺五重塔の例もあり、基壇の規模や初重の柱間寸法と比例するものではない。三重ないし五重塔と考えられる。回廊では東面回廊の北部で基壇規模が判明した。回廊の梁行は礎石間で3.0m(10尺)でそこから基壇端まで2.1m(7尺)となり、全体は7.2m(24尺)の規模である。基壇の高さは0.14mである。基壇は小石を基壇側面に貼り付けた造作で低い。

河内寺廃寺跡では塔・回廊の礎石の遺存状態がきわめて良好である。とくに塔では側柱12個のうち、第11次調査で5個が原位置を保って残存していた。今後の塔の調査でさらに礎石が発見される可能性が高い。礎石が検出された塔・回廊では、礎石と基壇端との距離が大きく、軒の出が深いことが特徴である。金堂では礎石が不確定であるが、塔や回廊と同じく軒の出の深い構造をもつ建物が建っていたものと推定される。金堂・回廊の存続時期については出土した軒瓦の検討のあと考えていきたい。

2)出土した軒瓦と金堂・回廊の存続時期

出土した軒瓦のうち、主体をなす組合せは次のとおりである。軒瓦型式の新旧対応は表4に示した。

①KWM1〔素弁八葉蓮華文軒丸瓦〕－KWH1〔三重弧文軒平瓦〕、飛鳥時代後期

②KWM2〔単弁十二葉蓮華文軒丸瓦〕－KWH2〔変形重弧文軒平瓦〕、白鳳時代

③KWM2〔単弁十二葉蓮華文軒丸瓦〕－KWH3〔偏行唐草文軒平瓦〕、白鳳～奈良時代

④KWM6・KWM7〔巴文軒丸瓦〕－KWH12・KWH13〔均整唐草文軒平瓦〕、鎌倉時代

このほかに、補修瓦として、⑤KWM3〔単弁十二葉蓮華文軒丸瓦〕－KWH4〔山形文軒平瓦〕の組合せがある。この組合せは平安時代中期に属する。

さて、軒平瓦には無文のものがあり(186)、①のセットの前段階として使用されたと考えられるが出土量が少なく、ほどなくKWH1に替えられたようである。①のKWM1は高句麗系軒丸瓦としてグルーピングされ、上田睦氏に拠ればⅡ群B4類に分類されている(上田1999)。KWM1は弁間に珠点をもたないことが特徴である。花弁形態は渋川廃寺(八尾市)や衣縫廃寺(藤井寺市)の素弁軒丸瓦と類似する。

②③は塔跡での出土量が最も多く②が塔創建時の軒瓦の組合せと考えられる。KWM２は摂津太田廃寺の軒丸瓦と同笵である。摂津太田廃寺ではKWH８の均整忍冬唐草文軒平瓦と酷似した同文の軒平瓦が出土している（網2007）。KWH２は藤原宮式軒平瓦の系譜上にあり、大和久米寺瓦窯製の藤原宮軒平瓦6561型式と同文である。弧線間に×印を連続刻印し瓦当部下端から顎部先端に指頭圧痕をとどめ波状に仕上げる軒平瓦は、河内九頭神廃寺（枚方市）や山城美濃山廃寺（八幡市）から出土している。また広い弧線間に斜格子状の刻線×を加え、波状の指頭圧痕を留める軒平瓦は近江の湖東式軒平瓦に見られる特徴である。ただし、河内寺廃寺跡のKWH２のように顎面にまで○×の刻印を施す例は現在のところ見当たらない。近江の指頭圧痕波状軒平瓦は、７世紀後半の限られた時期に作られたことが指摘されている（大脇2005）。したがって、KWH２は近江－山城－北河内の北からのルートと藤原宮からの東からのルートが結合して成立したことが想定できる。その時期は７世紀の第４四半期と考えられる。③のKWH３は西郡廃寺（八尾市）に同文品が出土している（野田1985）。

表５　軒瓦対応表

	本書の型式	第３次調査の型式	第11次調査の型式
軒丸瓦	KWM１	端瓦第Ⅰ形式	軒丸瓦Ⅰ類
	KWM２	端瓦第Ⅱ形式	軒丸瓦Ⅱ類
	KWM３	端瓦第Ⅲ形式	軒丸瓦Ⅲ類
	KWM４		軒丸瓦Ⅳ類
	KWM５		軒丸瓦Ⅴ類
	KWM６	端瓦第Ⅴ形式	軒丸瓦Ⅵ類
	KWM７	端瓦第Ⅴ形式	軒丸瓦Ⅶ類
軒平瓦	KWH１	端瓦第Ⅰ形式	軒平瓦Ⅰ類
	KWH２	端瓦第Ⅱ形式	軒平瓦Ⅱ類
	KWH３	端瓦第Ⅲ形式	軒平瓦Ⅲ類
	KWH４	端瓦第Ⅳ形式	軒平瓦Ⅳ類
	KWH５		軒平瓦Ⅴ類
	KWH６		軒平瓦Ⅵ類
	KWH７		軒平瓦Ⅶ類
	KWH８		軒平瓦Ⅷ類
	KWH９		軒平瓦Ⅸ類
	KWH10		軒平瓦Ⅹ類
	KWH11		軒平瓦Ⅺ類
	KWH12	端瓦第Ⅴ形式	軒平瓦Ⅻ類
	KWH13	端瓦第Ⅴ形式	軒平瓦Ⅻ類
	KWH14		
	KWH15		

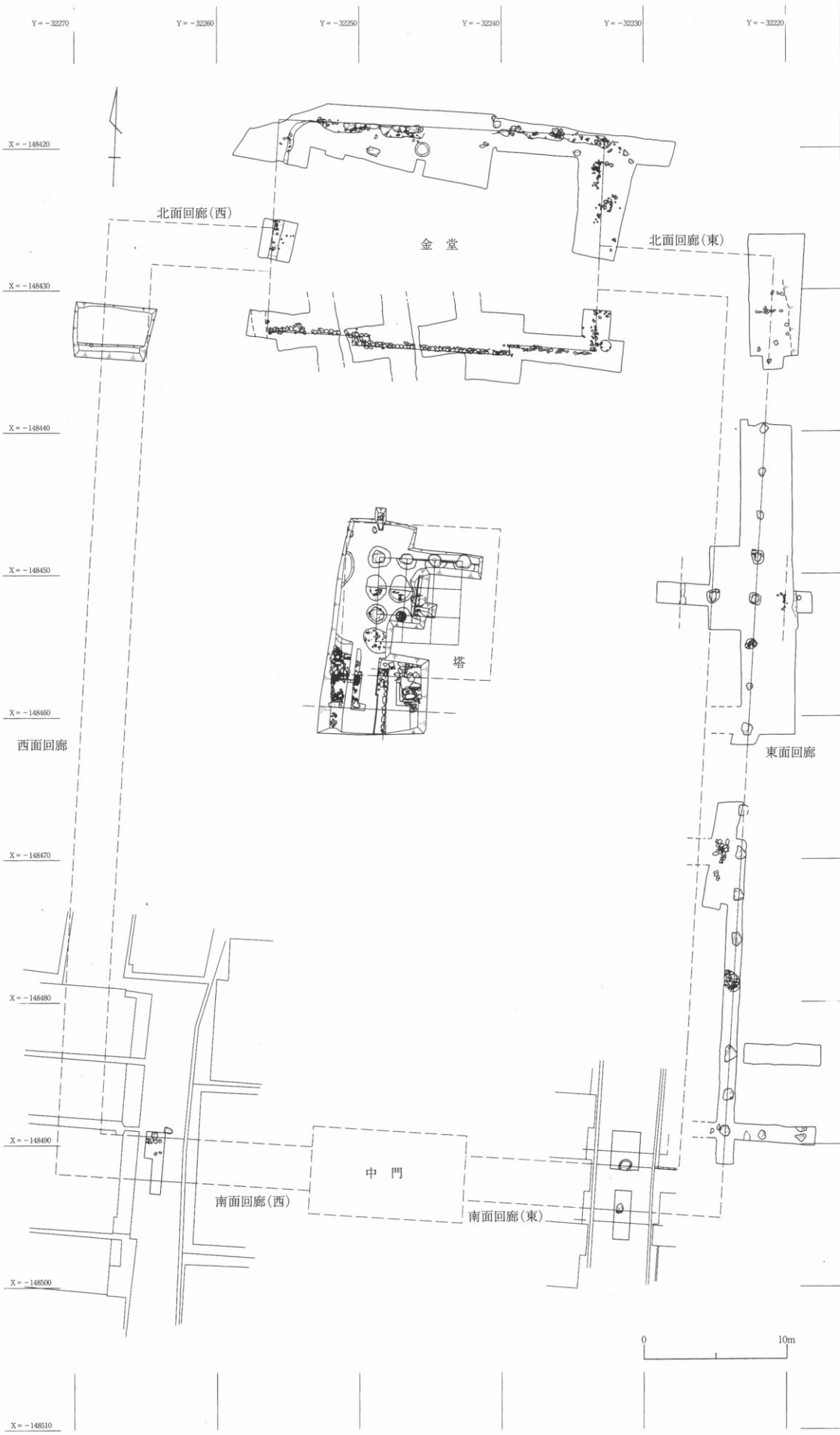
常塔造営の順序について、森郁夫氏は古代寺院の調査データや史料データを駆使し、初期寺院の造営には、金堂の工事が先行し、塔は次の段階で行われていたことを明らかにされた（森1994）。この所説を参照すると、河内寺廃寺では金堂がまず建立されたことになる。その時期は組合せ①から、飛鳥時代後期（７世紀中葉）と推定できる。すなわち①が金堂創建時の瓦となる。回廊については、断定できないが、東面回廊を調査した第２次調査での出土軒瓦をみると、点数は少ないが①の組合せが勝っており、金堂と併行して造営が着手されたことを窺うことができる。金堂・回廊の廃絶時期については、ともに基壇を覆う土石流状の堆積層に、14世紀初頭の瓦器椀を含むことから、鎌倉時代末期に求められるようである。

３）河内寺廃寺の建立氏族と河内郡衙

『和名類聚抄』所載の河内郡の郷名比定から、河内郡大宅郷を現在の東大阪市河内町周辺に推定した。「おおやけ」の語意から郡衙跡が皿池遺跡に推定され、河内寺廃寺が郡衙隣接寺院（郡寺）と考えられる。このため、河内寺廃寺の建立氏族は河内郡郡領を歴任した在地豪族に求められることになった。河内郡の郡領は、『日本三代実録』貞観四（862）年三月戊子（20）日条に、「河内国河内郡大領正六位上河内連田村麻呂（中略）授借外従五位下」と見える河内連氏である。河内連氏はもと直姓で、『日本書紀』天武天皇十（682）年四月庚戌（12）日条から同時期頃に一族の大半が連姓に変わったと理解されている。

河内連氏は、『新撰姓氏録』河内国諸蕃の部に、「河内連　出自百済国都慕王男除太貴首王也」と記され、百済系の渡来系氏族であることが知られる。なお笠井倭人氏や加藤謙吉氏により河内直(連)氏が百済ではなく安羅の出身とする所説があるが(笠井1971、加藤2001)、ここでは通説に従う。少なくとも河内直(連)氏は河内国河内郡を本拠にした渡来系氏族であることが確認できる。癸未年の年紀をもつ隅田八幡宮人物画像鏡に「開中費直」とあり、これが河内直の初見とされている。癸未年については、443年説と503年説があり決着を見ていないが、いずれにせよ古墳時代の後期ごろに河内直(連)氏が存在したことが知られる。欽明2(541)～5(544)年には、安羅日本府の上級官人として河内直が『日本書紀』に頻出する。河内直は新羅と計略を通じ、反百済的な外交施策を行なったとして、たびたび百済の聖明王から叱責を受けている。百済王が無視できない権力をもった外交官僚として描かれ、軍事・外交に秀でた氏族であったことがわかる。その手腕を買われ、天智天皇8(669)年には、第6次遣唐使として小錦中の河内直鯨が派遣されている(『日本書紀』)。神護景雲3(769)～延暦元(769)年まで河内連三立麻呂がたびたび『続日本紀』に見える。彼は法王宮大進から和泉守へと昇任し律令国家の中級官人として活躍している。『平安遺文補遺』所収の昌泰2(899)年「河内国河内郡土地売券」には、河内郡の大領・主政に河内連氏が3名検校し、四至保証刀禰として河内連氏が2名連ねている。この文書によって、9世紀末の段階にあっても河内直(連)氏が河内郡の郡領として大きな勢力を維持していたことがわかる。

河内郡の郡領として河内直(連)氏が活動していたことは上記のとおりである。それでは論の前提となる皿池遺跡の性格はどうであろうか。第3次調査では奈良～平安時代の掘立柱建物1棟のほか、掘立柱建物を構成する多数の柱穴が確認された(東大阪市教育委員会1979)が、郡衙跡の想定については結論を留保している。近年、皿池遺跡の性格を考える上で重要な遺物が発見された。それは皿池遺跡第8次調査で出土した三彩陶である(東大阪市教育委員会2007、第2図▲5地点)。三彩陶は渤海三彩の可能性が指摘され、少なくとも器形や施釉から唐三彩とは異なった特色をもつと考えられている。渤海三彩の遺品は奈良県明日香村の坂田寺跡出土の三彩壺片などきわめて稀少である。集落跡で出土する遺物ではなく、河内郡衙との関連性が濃いものである。坂田寺跡出土三彩壺は8～9世紀に属する。河内直(連)氏が活発な政治活動を行なっていた時期にあたる。また河内直(連)氏は外交の手腕に長けた氏族であり、その活動を通じて三彩陶を入手したことが想定できる。以上の資料から、河内郡衙を構成する建物は、河内寺廃寺跡の北方(皿池遺跡第3次調査地周辺)ではなく、その西方(皿池遺跡第8次調査地周辺)に求められる可能性が高い。東西に郡衙と郡寺が並列する例としては、弥勒寺跡と弥勒寺東遺跡の例(岐阜県関市)が挙げられる。郡衙隣接寺院に郡寺として公的な位置づけを与えることに否定的な見解(菱田2007)があるが、河内直(連)氏は8世紀の国郡制から10世紀まで郡領を歴任しており、郡衙に隣接する河内寺廃寺は郡寺として河内直(連)氏の庇護のもと寺院伽藍の維持が図られたものと考えられる。



第45図　河内寺廃寺伽藍平面図

【参考文献】（本文中及び3ページの「河内寺廃寺跡瓦一覧表」に掲げたものは省く）
藤井直正1966「河内寺跡」（『枚岡市史　第3巻史料編(一)』）
稲垣晋也1971『古代の瓦〔日本の美術66〕』、至文堂刊
藤井直正1971「河内寺とその遺跡」（『日本の中の朝鮮文化』11号、日本の中の朝鮮文化社刊）
笠井倭人1971「加不至費直の系譜について」（『日本書紀研究』第5冊、塙書房刊）
穐垣晋也1975a「丸塚」（『新版仏教考古学講座　第2巻寺院』、雄山閣出版刊）
穐垣晋也1975b「近畿」（『新版仏教考古学講座　第2巻寺院』、雄山閣出版刊）
東大阪市教育委員会1979『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』
坪之内徹1979『藤原宮式軒瓦とその分布』（『日本書紀研究』第11冊、塙書房刊）
野田晃世1985「萱振遺跡出土の中世瓦積井戸」（『八尾市文化財紀要Ⅰ』）
森郁夫1994「わが国における初期寺院の造営」（京都国立博物館『学叢』第16号）
網伸也1997「摂津の古墳と寺院」（『季刊考古学』60号、雄山閣出版刊）
上田睦1999「高句麗系軒丸瓦と渡来系氏族」（『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』）
加藤謙吉2001『吉士と西漢氏』、白水社刊
大脇潔2005「北京胡同覚紀行―東アジアにおける軒平瓦の変遷―」（『古代摂河泉寺院論文集Ⅰ 2集）
網伸也2007「摂津と河内をつなぐもの～軒瓦にみられる在地間寺院交流～」（財団法人大阪府文化財センター『摂河泉古代寺院の総合的研究』）
大脇潔2007「仮称『摂河泉古代寺院一覧』の作成に向けて」（財団法人大阪府文化財センター『摂河泉古代寺院の総合的研究』）
東大阪市教育委員会2007『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成18年度－』
菱田哲郎2007『古代日本　国家形成の考古学』、京都大学学術出版会刊

報告書抄録

ふりがな	かわちでらはいじあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	河内寺廃寺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	菅原　章太・才原　金弘
編集機関	東大阪市教育委員会社会教育部文化財課
所在地	〒577－8521　東大阪市荒本北50番地の4
発行年月日	2007年7月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
かわちでらはいじあと 河内寺廃寺跡	東大阪市河内町441番地ほか	27227	63	昭和42年～平成19年	1663㎡	保存目的開発工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
社寺跡	飛鳥～鎌倉時代	金堂・塔・東面回廊・南面回廊	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾・鬼瓦・ヘラ描き絵画瓦・弥生土器・須恵器・土師器・玉・円面硯・獣脚	第1～16次調査の集成

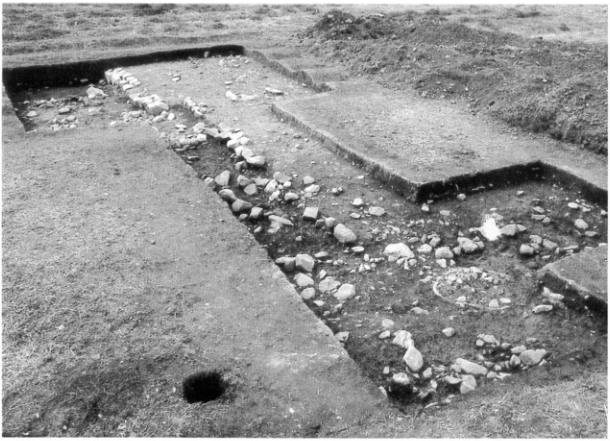
図　　版

図版1　遺構

河内寺廃寺跡現況（西から）

1．河内寺廃寺跡現況（東から）

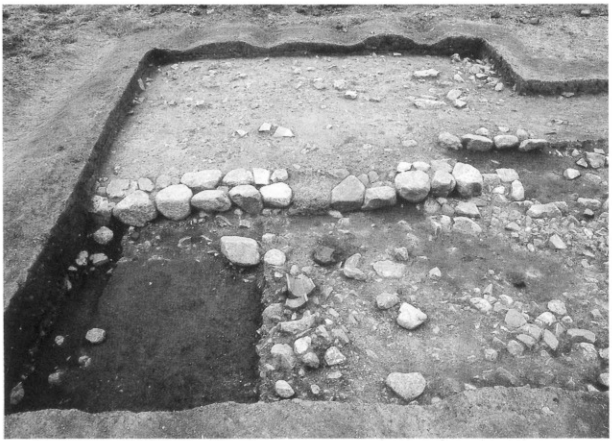
2．南から塔跡を望む（昭和40年代初め）



1．金堂基壇南側石列検出状況（南東から）

2．金堂基壇南側石列検出状況（西から）

図版4　遺構



1．金堂基壇南側中央階段検出状況（南から）

2．金堂基壇南東隅検出状況（東から）

1．溝に切られた金堂基壇南西隅検出状況（南から）

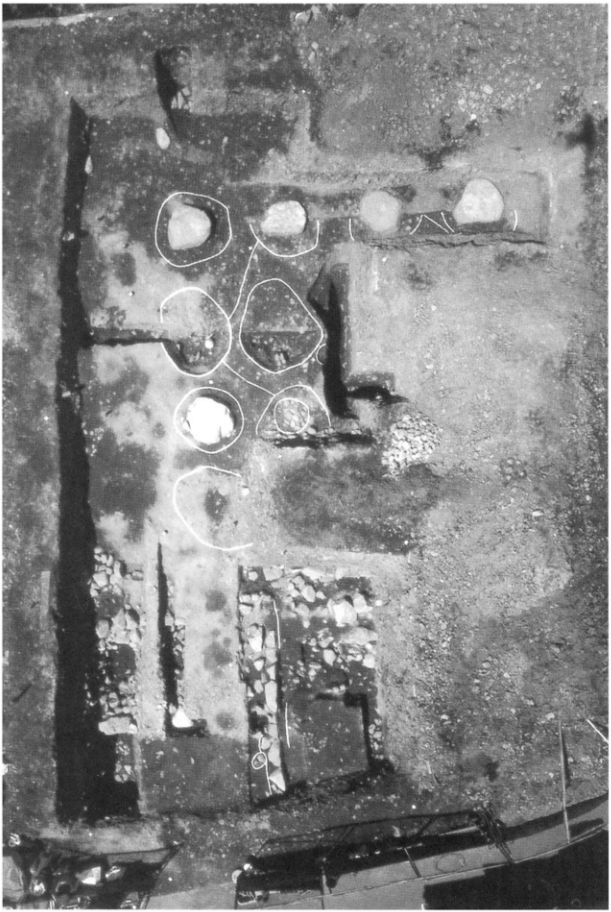
2．金堂基壇西側検出状況（北から）

1．金堂基壇北側石列検出状況（北東から）

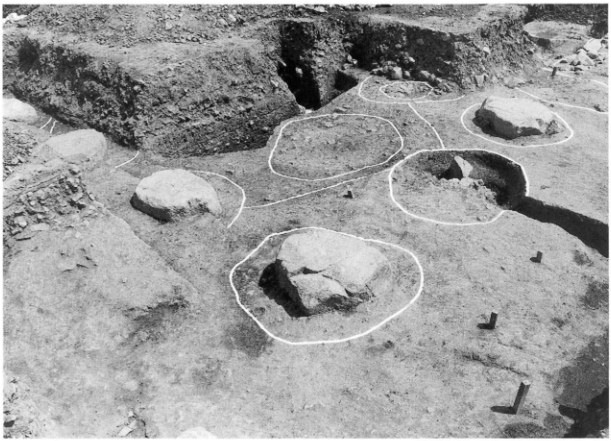
2．金堂基壇北側石列検出状況（東から）

1．金堂基壇北西隅検出状況（北東から）

2．金堂基壇北西隅検出状況（南から）

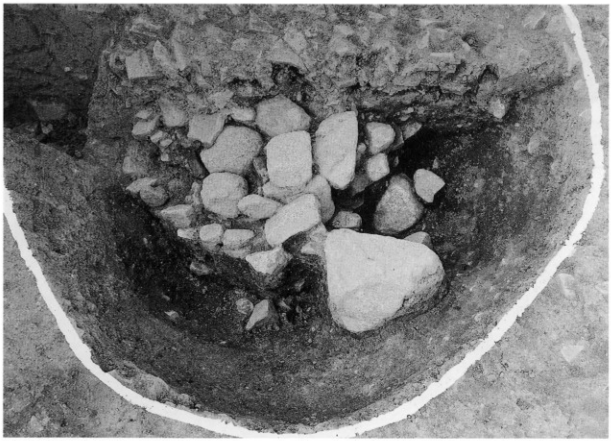


塔調査地全景（上空から）



1．塔側柱礎石列検出状況（北西から）

2．塔側柱礎石列検出状況（東から）



1．塔礎石抜取穴１内礎石抜取痕跡検出状況

2．塔四天柱礎石抜取穴北西内礎石抜取痕跡検出状況

1．塔創建時基壇検出状況（南から）

2．塔拡張時基壇検出状況（南から）

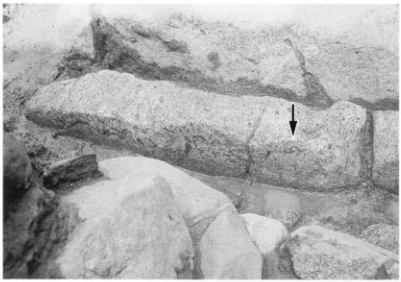
図版12　遺構

1．塔心柱内土層堆積状況（東から）

2．塔基壇の版築（西から）

1．塔創建時基壇南面階段検出状況（西から）

2．塔創建時基壇南面雨落溝検出状況（南から）



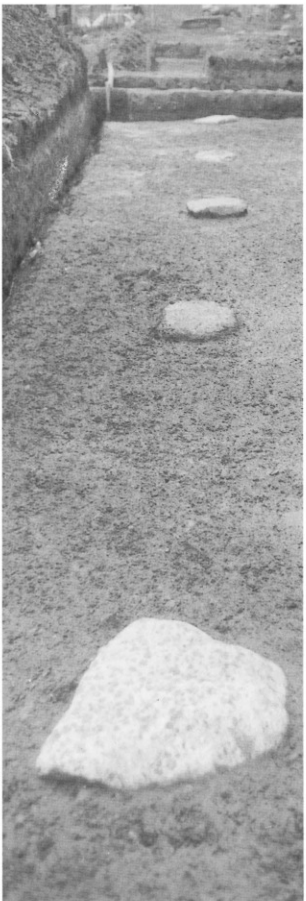
3．雨落溝凝灰岩上の墨書検出状況（南から）矢印は墨書

図版14　遺構

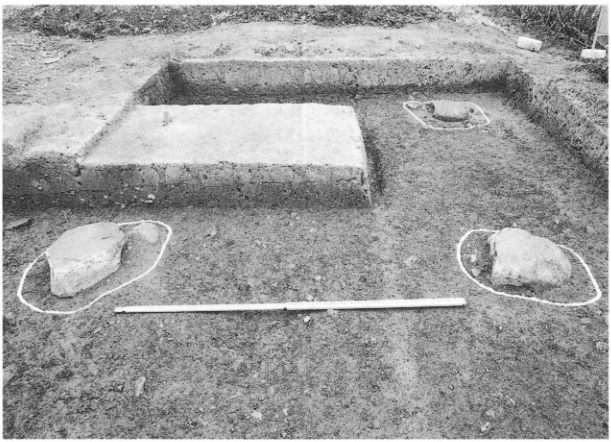
1．中世仏堂検出状況（西から）

2．中世仏堂検出状況（南から）

1．東面回廊礎石列南部検出状況（南から）

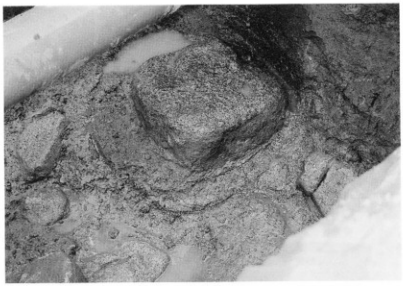


2．東面回廊礎石列北部検出状況（北から）

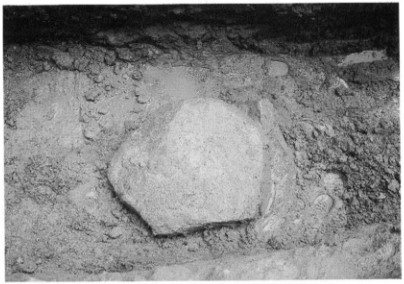


1．東面回廊礎石列検出状況（南から）

2．東面回廊基壇と礎石列検出状況（東から）



1．南面回廊東部礎石検出状況
（北西から）



2．南面回廊東部礎石検出状況
（西から）

3．南面回廊西部礎石検出状況
（西から）

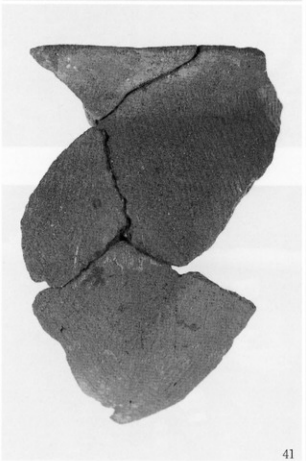
44

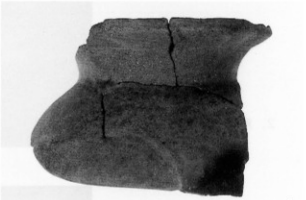
3

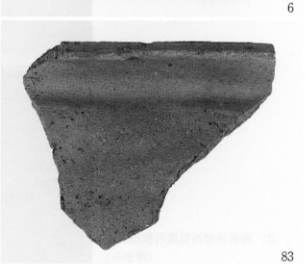
82

2

1


41


6

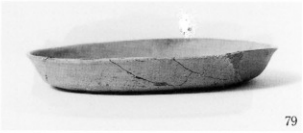

83

弥生土器壺・甕、土師器甕・高杯

76

40

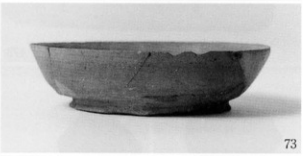
102


79

89

25

124


73

84

68

土師器甕・鉢・椀・皿、須恵器杯・高杯

74

174

173

175

175'

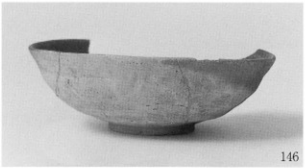
67

70

144

145

須恵器杯・壺・円面硯・獣脚、瓦器椀・羽釜


146

171

150

168

167

153

169

155

152

151

154

157

瓦器椀

図版22　遺物

1．軒丸瓦

2．軒平瓦

176

177

179

178

178'

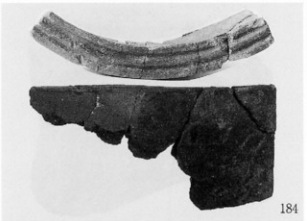
181

180

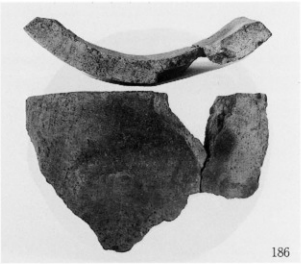
183

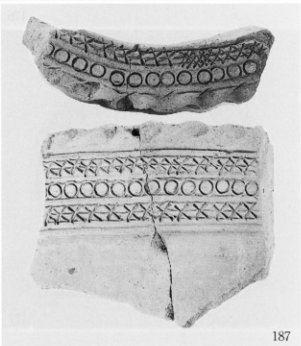
軒丸瓦

182


184

185


186


187

188

189

軒丸瓦・軒平瓦

190

191

192

194

195

193

196

198

197

199

軒平瓦

200

202

207

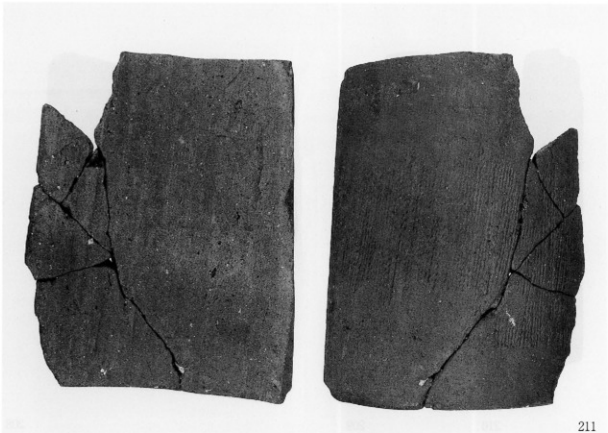
203

204

205

206

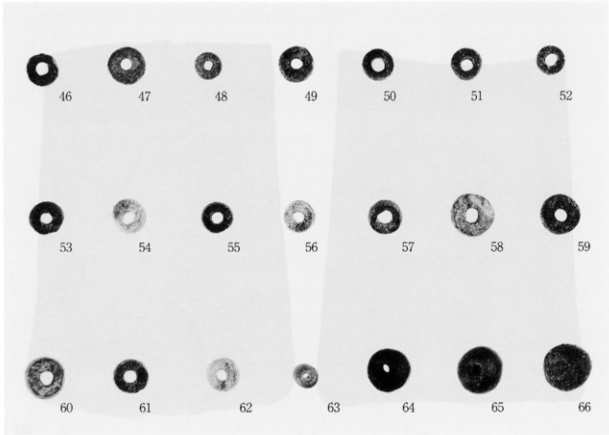
軒平瓦・鴟尾・鬼瓦



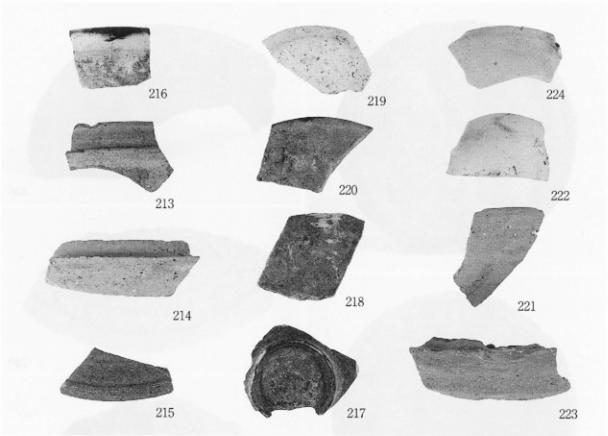
211
1．平瓦

212
2．平瓦

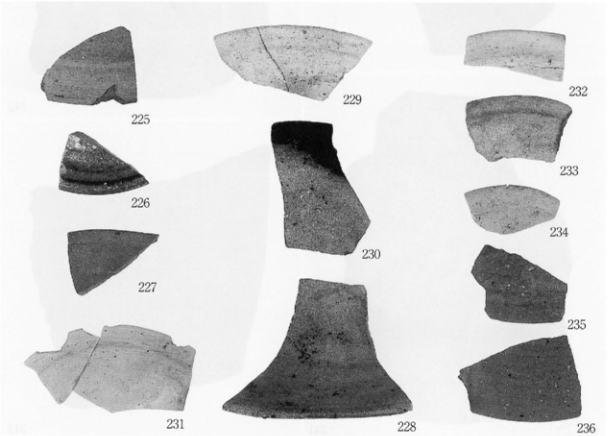
1．丸瓦・ヘラ描き絵画瓦



2．玉



1．第15次調査出土　須恵器杯・高杯、瓦器椀、土師器皿



2．第15次調査出土　須恵器蓋杯・高杯、土師器椀・皿

237

238

239

240

242

241

243

第15次調査出土　軒丸瓦・平瓦

244

245

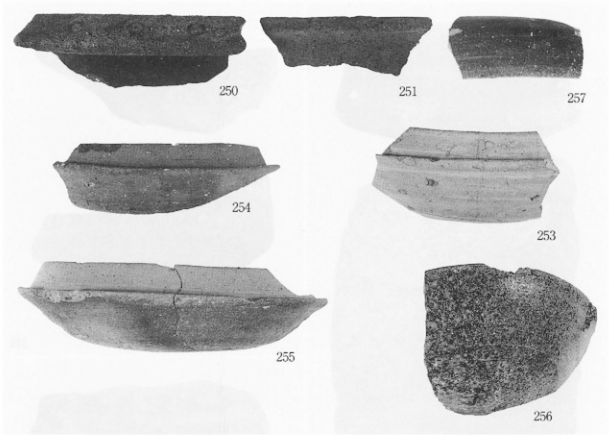
247

246

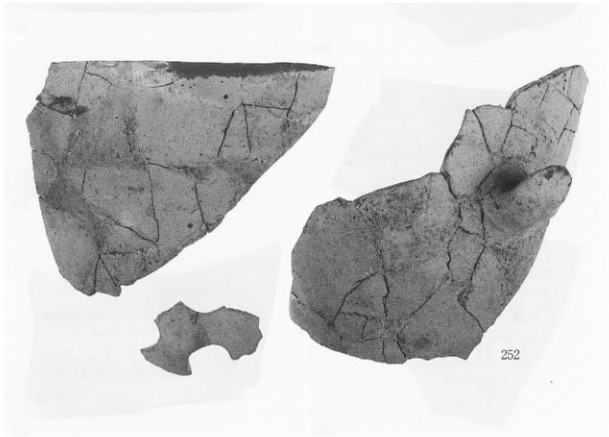
248

249

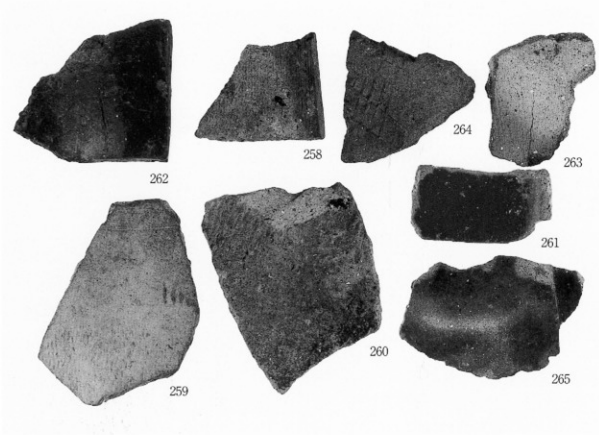
第15次調査出土　軒平瓦



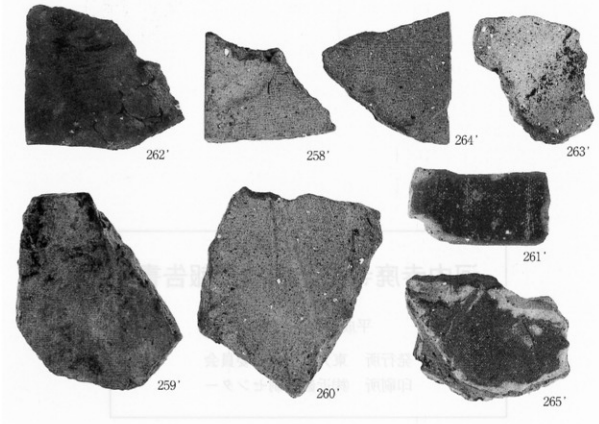
1．第16次調査出土　弥生土器壷・鉢、須恵器杯・壷杯



2．第16次調査出土　土師器甑



1．第16次調査出土　平瓦・丸瓦凸面



2．第16次調査出土　同上凹面

河内寺廃寺跡発掘調査報告書

平成19年７月31日

発行所　東大阪市教育委員会
印刷所　㈱近畿印刷センター